貝塚市埋蔵文化財調査報告第13集

王子遺跡発掘調査概報　II

第３次調査

１９８６・３

貝塚市教育委員会

はじめに

わが貝塚市は、緑豊かな和泉山脈と波静かな大阪湾に面した平野部をひかえ気候温暖で、特に平野部では生活環境はすばらしいものがあります。こういっためぐまれた自然環境とともに、わたくしたちの先人の足跡ともいうべき古代からうけつがれてきた歴史や伝統を今に伝える貴重な文化的遺産も数多く貝塚市には散在しております。

今回、貝塚市にのこされる歴史の一端を明らかにする機会にめぐまれ、また本調査報告書として発刊するはこびとなりましたことは、過去の人々の生活を知るうえにおいてたいへん有意義なこととかんがえます。

本調査報告書を作成するにあたりまして、発掘調査ならびに報告書作成にいたるまでテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社より全面的なご協力とともに援助を受けましたことを深く感謝いたします。

本報告書発刊にあたりまして、みなさまの文化財に対する理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存ならびに活用の一助となれば幸いに存じます。

貝塚市教育委員会

教育長　岡　根　和　雄

例　　言

1．本調査概報はテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社が開発を予定している貝塚市地蔵堂字ムカイ74番地他地内に所在する王子遺跡の発掘調査に関するものである。

2．調査は遺構確認調査を昭和59年４月25日より実施し、本格的発掘調査を第３次調査として、昭和60年３月11日より６月５日にかけて実施したものである。

なお、第１・２次調査については鹿島建設株式会社大阪支店が開発を予定している敷地内についての発掘調査である。

3．本件の発掘調査はテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社の全面的な協力により実施したものである。

4．発掘調査の実施および本書の編集・執筆については、貝塚市教育委員会社会教育課西岡　巖の指導のもと社会教育課嘱託勝浦康守がこれにあたり、作業の実施にあたっては下記の諸氏の協力を得た。

外・内業調査員　嘉積由彦

外業調査補助員　石橋秀仁　小林　修　山下展功　山西宏司　西野貴也

内業調査補助員　芝野久美子　藤原久子　大橋良子　山本和枝

5．本調査概報中において使用した遺構名の呼称については、各遺構の種類に応じて記号を付し、次に遺構番号を順に付していった。本文、図版および捜図中に使用した同一遺構および同一遺物については、統一して同一記号、番号を使用している。

6．発掘調査の実施にあたっては、上記諸氏の協力を受けたほか大阪府教育委員会文化財保護課および貝塚市文化財保護審議会委員の方々より多大の御指導、御教示を受け、また依頼者であるテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社からは全面的な協力と援助を受けた。さらに、現場作業を行うにあたり当初より才門建設株式会社には多大な配慮を受けた。ここに記して感謝の意を表します。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次

本　文　目　次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　調査に至る経過 …… 3

第３章　第３次調査
1．調査の概要 …… 5
2．検出遺構 …… 5
3．出土遺物 …… 14
4．まとめ …… 23

付　編）　貝塚市出土の瓦器編年試案
1．はじめに …… 25
2．分析資料と分析 …… 25
3．分析結果 …… 26
4．結　　論 …… 31

図版目次

図版１　調査地全景
図版２　検出遺構
1.掘立柱建物群および井戸ＳＥ－３０１　2. 同　上
図版３　検出遺構
1.溝ＳＤ－３２１および小溝群
2. 同　上
図版４　検出遺構
1.溝ＳＤ－３１６および段ＳＸ－302　2. 方形周溝遺構SX－301
図版５　検出遺構
1.溝ＳＤ－３２１土器群検出状況
2. 同　上
図版６　検出遺構
1.土壙ＳＫ－３０１土器群検出状況
2. 同　上
図版７　検出遺構
1.方形周溝遺構ＳＸ－３０１土器群検出状況　2. 同　上
図版８　出土遺物
Ｐｉｔ－３０４（１６３・１６６～１６９）、Ｐｉｔ－３１２（１６２）ＳＥ－３０１（１７１～１７４）
図版９　出土遺物
ＳＥ－３０１（１７５・１７８・１８０～１８３・１８５～１８８）
図版10　出土遺物
ＳＥ－３０１（１８９～１９４・１９６～１９８・２００）
図版１１　出土遺物
ＳＤ－３２１（２０１～２１０）
図版１２　出土遺物
ＳＤ－３２１（２１１～２１６・２１８・２２０・２２１・２２３）
図版１３　出土遺物
ＳＤ－３２１（２２６・２２９～２３２）、ＳＫ－３０１（２４４・２４５）、ＳＫ－３０２（２４３）、ＳＸ－３０１（２４２）
図版１４
ＳＫ－３０１（２４６・２５６・２６０・２６２）、ＳＤ－３０１（２３５～２４０・２６８）、包含層（２６５～２６７）

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査地概略図
図４　遺構配置図
図５　掘立柱建物ＳＢ－３０１
図６　掘立柱建物ＳＢ－３０２
図７　掘立柱建物ＳＢ－３０３
図８　掘立柱建物SB-301・SB-302 SB-303出土遺物

図　９　井戸ＳＥ－３０１出土遺物
図１０　井戸ＳＥ－３０１出土遺物
図１１　溝ＳＤ－３２１出土遺物
図１２　溝ＳＤ－３２１出土遺物
図１３　溝ＳＤ－３０１出土遺物
図１４　溝・土壙・方形周溝遺構出土遺物
図１５　包含層出土遺物

表　目　次

表１　遺構時期推定表

付編挿図目次

図１　ヘラミガキ文様の変遷
図２　瓦器椀の時期区分
図３　瓦器小皿の時期区分
図４　土師器小皿の時期区分
図５　土師器大皿の時期区分
図６　瓦器椀の口径・器高・高台径
度数分布

付編表目次

表１　瓦器椀・瓦器小皿・土師器小皿
土師器大皿の口径と器高

付表　貝塚市遺跡群における中世土器
編年試案

第１章　位置と環境

王子遺跡は、貝塚市地蔵堂および王子地内に所在し、国鉄阪和線和泉橋本駅の西方に位置し、東西約400ｍ、南北約250ｍの広がりを持つ、鎌倉～江戸時代にかけての集落遺跡である。

調査地は、貝塚市の中央を縦断する近木川と泉佐野市との境を流れる見出川とに挟まれた、和泉丘陵から北西へのびる洪積台地の南側緩傾斜面に位置し、その背後には、花崗岩類、泉南酸性岩類、和泉層群からなる和泉山脈が形成されている。また、大阪府文化財分布地図（昭和53年）では、地蔵堂廃寺跡に南接して位置するが、遺跡としての認識は、昭和58年、旧テイサン貝塚南工場跡地の開発工事に伴う試掘調査において、遺跡の存在が確認されたことにはじまる。調査地周辺は、すでに宅地化されており、国鉄阪和線以東では、水田耕作地が広くみられるが、今回の開発をはじめとし、今後さらに開発が進められる地域であろう。

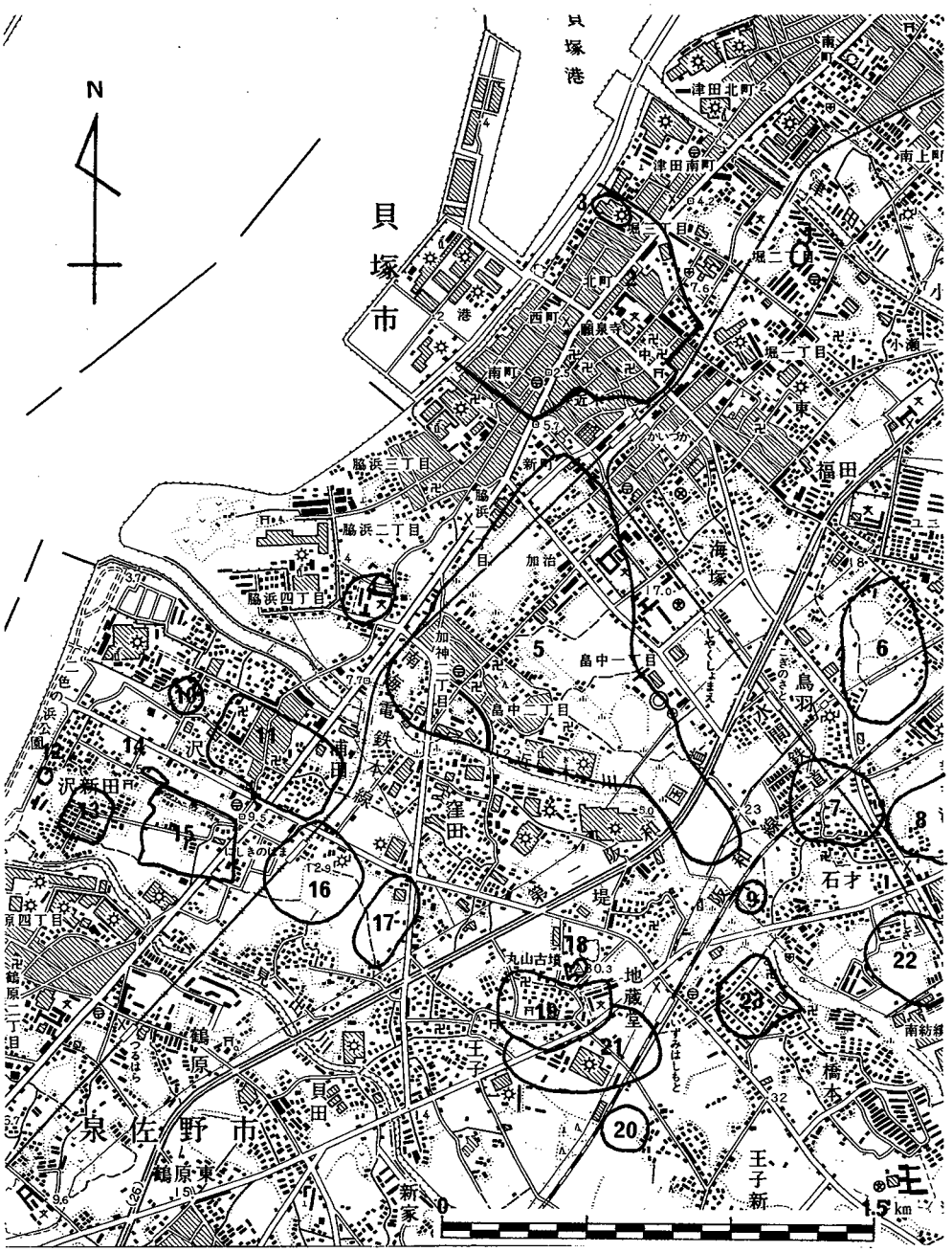
周辺に散在する遺跡としては、府道和泉泉南線で分断されて位置する平安時代の寺院跡である地蔵堂廃寺跡が、また貝塚市唯一の前方後円墳である丸山古墳が存在する。

周辺での調査で、この地域の歴史は旧石器時代にまで遡ることが明らかとなった。旧石器は、主に後世の地層からの出土であるが、王子遺跡発掘調査・第１次調査では、旧石器時代相当層からの出土がみられる。縄文～弥生時代の遺跡に関しては、現在、確認されていない。古墳時代には、全長66ｍ、前方部最大幅約27ｍ、後円部径約43ｍを測る丸山古墳が造営される。近年、丸山古墳周辺での数次にわたる発掘調査により、古墳時代中期の埋没古墳が数基確認されており、当地域は、あたかも墓域と化したような様相をみせ、古代の様相がしだいに明らかになりつつある。

奈良時代以降は、熊野街道の経路地にあたり、古くから交通の便を得た地域でもあった。熊野街道の沿道には、「熊野九十九王子」と称する神祠が祀られていたとされる。『貝塚市史』によれば、市域には、麻生河王子、鞍持王子、近木王子の三王子社を推定している。おそらく「王子」という地名も、熊野街道の沿道に祀られたとされる「王子社」に由来するものであろう。

中世以降は、古文書記録にもみえるように、荘園化が進み、農村集落化の過程へ入っていくことになる。

今後さらに中世遺構面の調査が進めば、今回の発掘調査の成果をも含めて、考古学的立場からの中世集落についての把握が期待されるであろう。　（勝浦）



1.堀 遺 跡 2.貝塚寺内町 3.泉州麻生塩壺出土地 4.長楽寺跡 5.加治・神前・畠中遺跡
6.新井・鳥羽遺跡 7.石才遺跡 8.新井ノ池遺跡 9.橋本遺跡 10.沢共同墓地遺跡 11.沢城跡
12.沢新出遺跡 13 沢海岸遺跡 14.沢海岸北遺跡 15.廃明楽寺跡 16.澱池 遺跡 17.窪田廃寺跡
18.丸山古墳 19.地蔵堂廃寺跡 20.下新出遺跡 21.王子遺跡 22.石才南遺跡 23.積善寺城 跡

図1 貝塚市遺跡分布図

第２章　調査に至る経過

貝塚市地蔵堂66-2番地他に所在する旧テイサン貝塚南工場跡地の約66,000㎡あまりの敷地内にショッピングセンターおよび住宅建設の開発計画が、それぞれテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社、鹿島建設株式会社大阪支店よりもちあがったことから、事前調査として遺構確認調査の結果から遺構の残存する地区約8,000㎡あまりについて、３次に渡る発掘調査を実施していった。

今回報告するのは第３次調査の報告である。

当開発予定区域は当初大阪府教育委員会発行の「大阪府遺跡地図」によれば、周辺には埋蔵文化財包蔵地の所在は確認されているものの、当地は遺跡としてはまだ未確認の地域であった。

図２　　調査地位置図

このような状況下ではあったが、開発面積が膨大であると同時に周辺の遺跡に近接し、また地形的にみても埋蔵文化財が包蔵されている可能性は十分に想定される所であったこ

とから、開発の実施計画に先立ち開発者である鹿島建設株式会社大阪支店およびテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社と貝塚市教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、遺構確認調査を実施したうえで遺構等の存在が明かとなった場合、範囲を定めて本格的発掘調査を実施することとし、鹿島建設株式会社大阪支店が開発を予定している地区の遺構確認調査を昭和58年11月１日より実施するとともに、今回報告分のテイサン貝塚ショッピングセンター株式会社が開発を予定している地区については、昭和59年４月25日より約１周間をかけて遺構確認調査を実施した。その調査結果より、調査区の各所から溝状遺構や柱穴等を検出したため、遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、昭和60年３月11日より遺構の残存する地域約2800m²について約３ケ月の期間をかけて発掘調査を実施していった。（西岡）

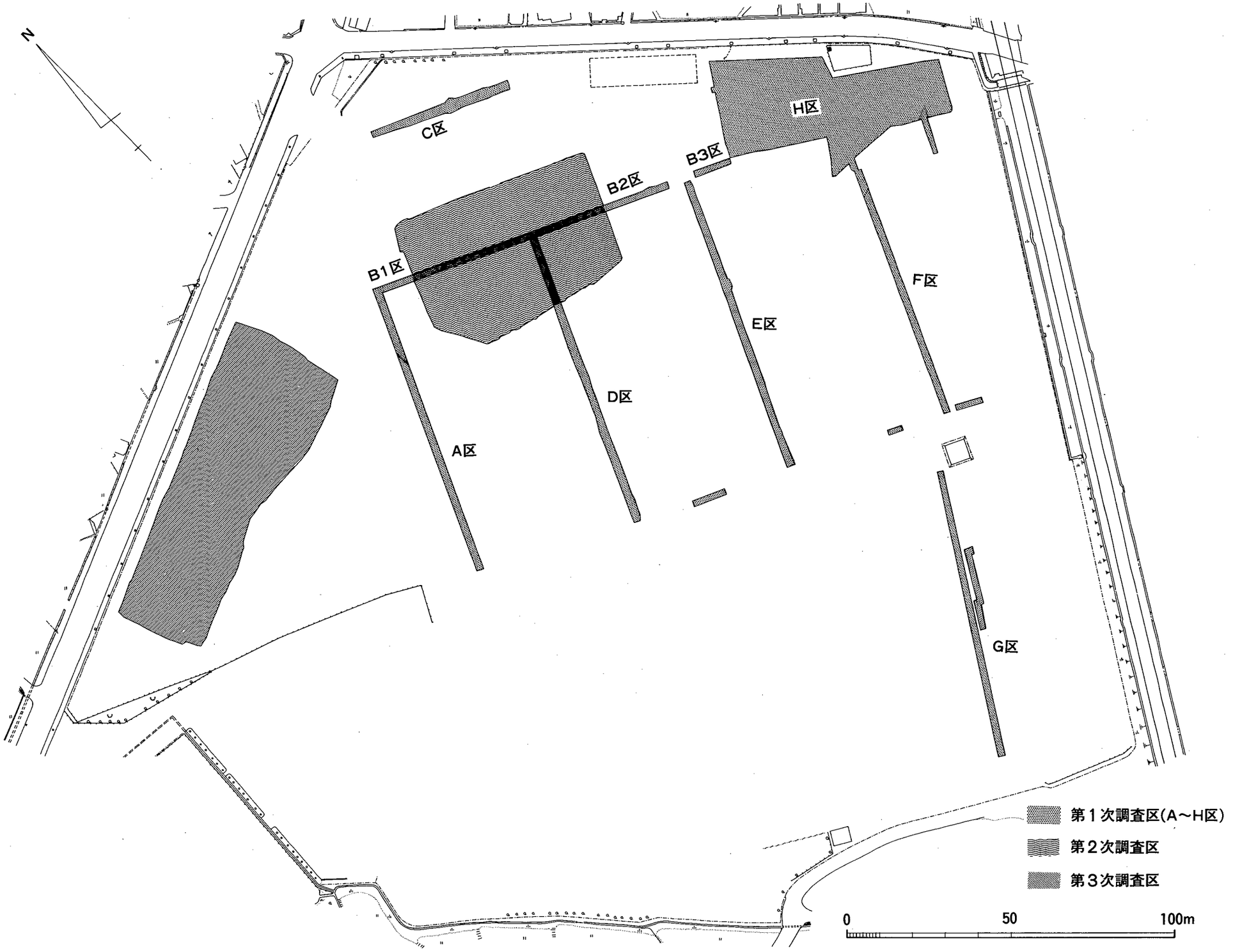

N
C区
H区
B3区
B2区
B1区
F区
E区
D区
A区
G区
第１次調査区(A～H区)
第２次調査区
第３次調査区
0
50
100m

図 3　調査地概略図

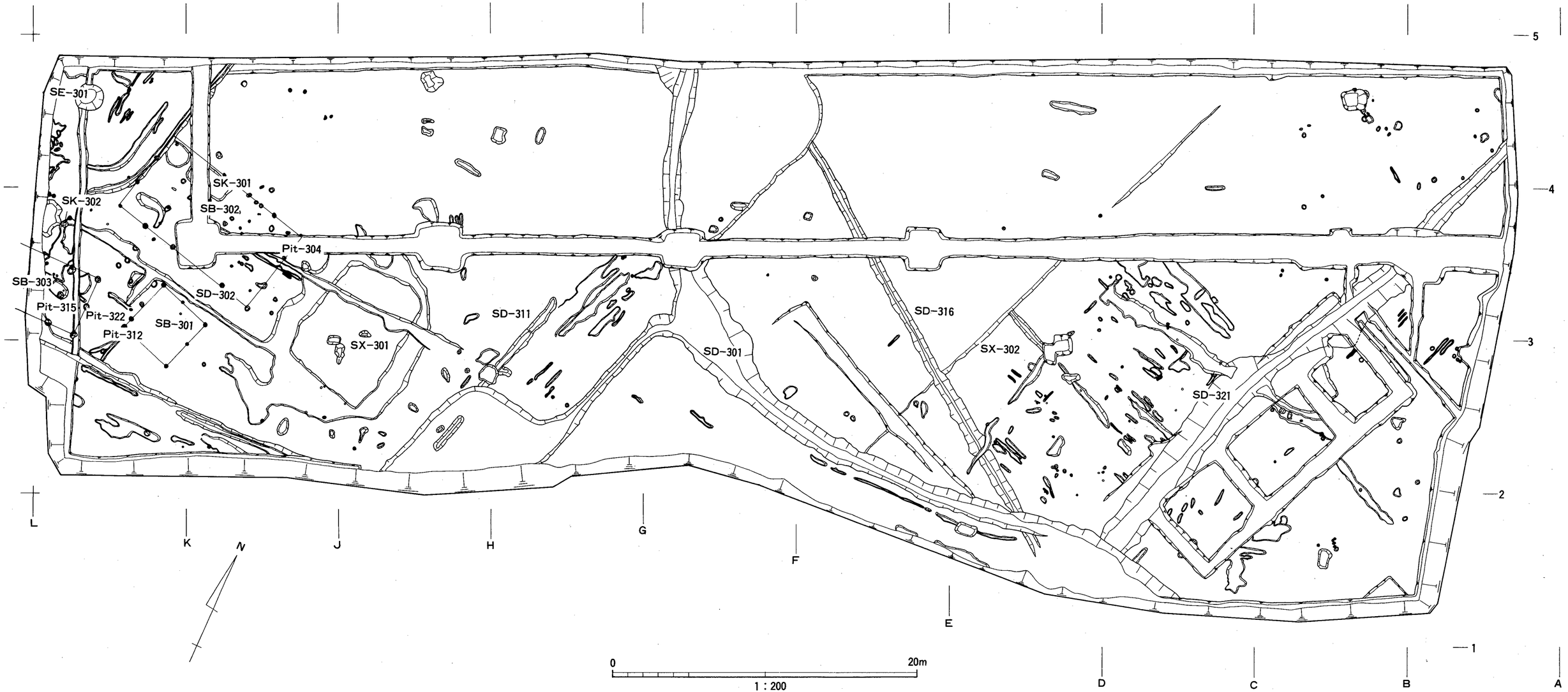

SE-301
SK-301
SK-302
SB-302
Pit-304
SB-303
SD-302
Pit-315
Pit-322
SB-301
Pit-312
SX-301
SD-311
SD-301
SD-316
SX-302
SD-321
5
4
3
2
1
L
K
J
H
G
F
E
D
C
B
A
N
0
20m
1 : 200

図 4　遺構配置図

第3章　第3次調査

1．　調査の概要

開発計画に基づき、調査敷地内の北西部に南北26～35m、東西約95m、面積約2800m²の調査地区を設定した。調査地区の現地表面は、標高約O.P+ 27.5mである。調査地区における基本層序は現代盛土（約1m）、旧耕作土層（約0.1m）、の下に、層厚0.15～0.3mを測る含砂礫黄橙～黄褐色砂質シルト層（第1層）、その下に層厚0.1～0.15mを測る含砂礫灰黄～茶褐色砂質シルト層（第2層）、が堆積する。第2層は主に遺構埋土となるが、その堆積は3ライン以南D～E間にのみ認められ、広範囲での削平が考えられる。この下は遺構が検出されるベースとなる黄橙色粘土質シルト～砂礫層（地山）となり、調査地区東端では標高約O.P+ 26.5mを測るが、西端ではO.P+ 25.4m程度まで低下する。今回の調査では、地山上面で井戸・掘立柱建物などの居住遺構をはじめとし、溝・土壙および不明遺構の他、田畑の耕作に伴うと思われる多数の小溝群等を検出した。以下、検出遺構および出土遺物についての概略を記すことにする。　（勝浦）

2．　検出遺構（図4）

調査地全域で各種遺構を検出したが、主にHライン以西で遺構の存在が密になる。今回の調査では、掘立柱建物3棟、井戸1基、溝7条、土壙2基、不明遺構1基の他、南北もしくは東西方向に走る多数の小溝群を検出した。以下、これら検出遺構の内、主なものについて記述することにする。

掘立柱建物　SB-301（図5、図版2）

調査地K－2区で検出した東西2間、南北2間の掘立柱建物である。棟方向は南北軸で東へ18°傾いている。梁行3.8m、桁行3.8mで柱間寸法は梁行北から1.8m、2.0m、桁行東から2.0m、1.8mである。掘形は径0.2～0.3mの平面形が不整円形を呈し、深さは0.15～0.2mを測る。埋土は茶褐色砂質シルト（第2層）である。南西隅柱穴（Pit-312）から瓦器椀が出土している。

掘立柱建物　SB-302（図6、図版2）

調査地J～K－3～4区で検出した東西5間、南北3間の掘立柱建物である。棟方向は南北軸で東へ14°傾いている。梁行5.8m、桁行10.7mで柱間寸法は梁行1.8～2.1m、桁行2.1～2.3mである。掘形は径0.2～0.4mで、平面形が円形もしくは不整楕円形を呈する。深さは0.15～0.3mを測る。埋土は茶褐色砂質シルト（第2層）である。Pit-304から瓦器

埦、瓦器小皿、土師器小皿が出土している。

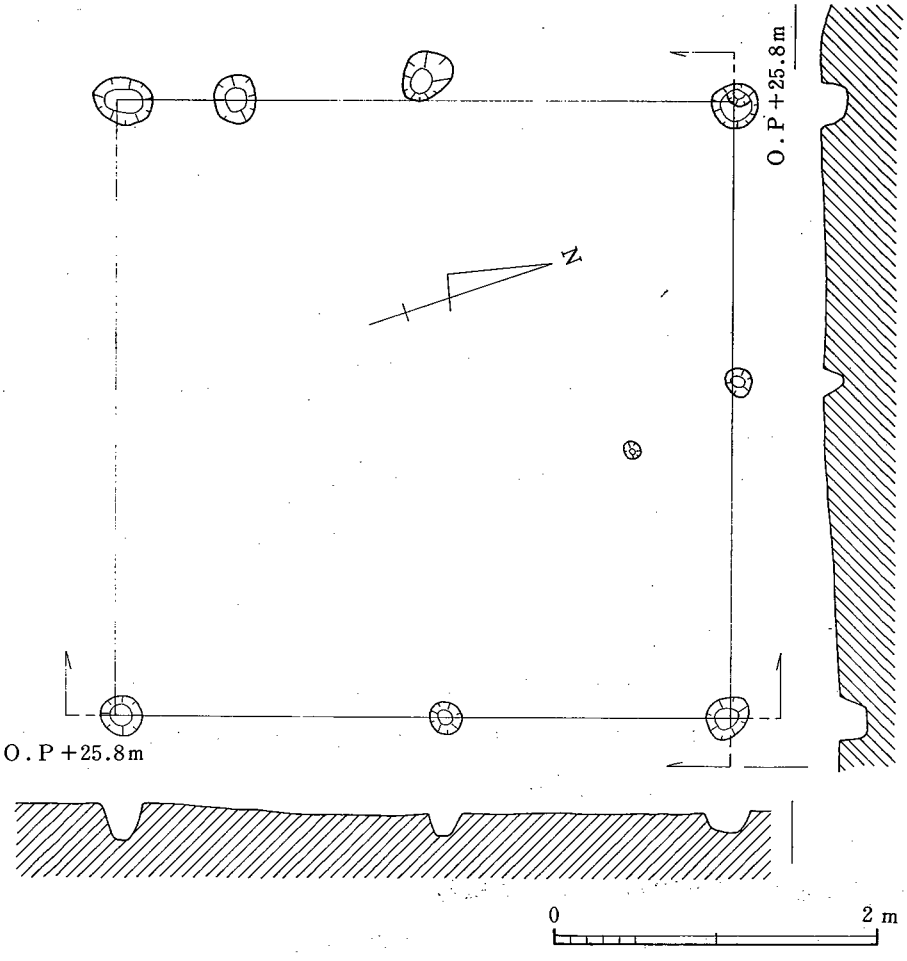


図5　掘立柱建物　SB－301

掘立柱建物　SB-303　（図7、図版2）

調査地K～L－3区で検出し、調査地区内で東西2間、南北2間の掘立柱建物である。建物は調査地区外へ広がる。棟方向は ほぼ真北を示す。調査地区内での梁行は4.0m、桁行は4.0mで、柱間寸法は梁行・桁行、共に2.0m等間である。掘形は径0.4～0.6mの平面形が円形もしくは不整楕円形を呈し、深さは0.2～0.4mを測る。埋土は茶褐色～灰青色砂質シルト（第2層）である。Pit－315・323から瓦器埦が出土している。

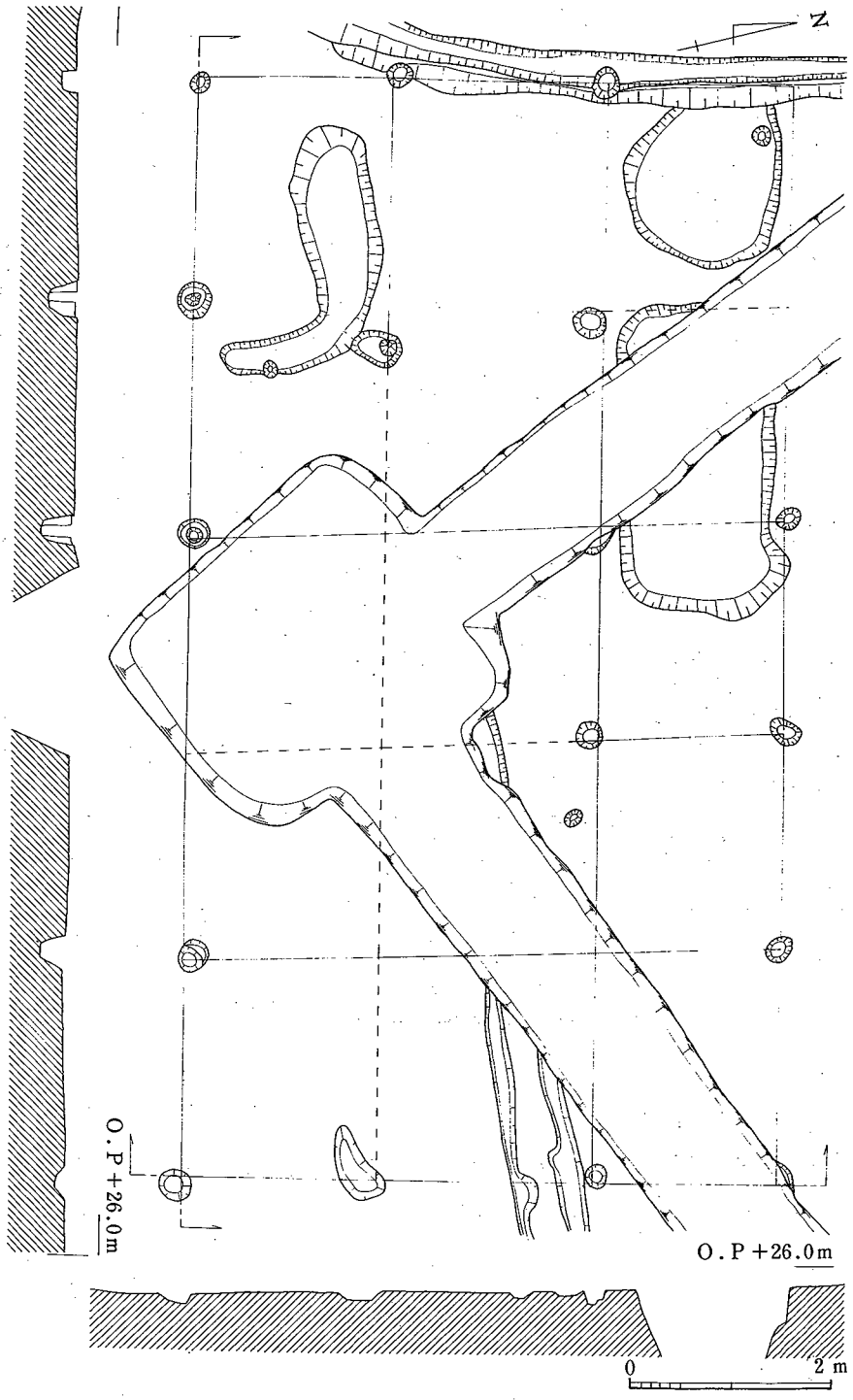


図6　掘立柱建物　SB-302

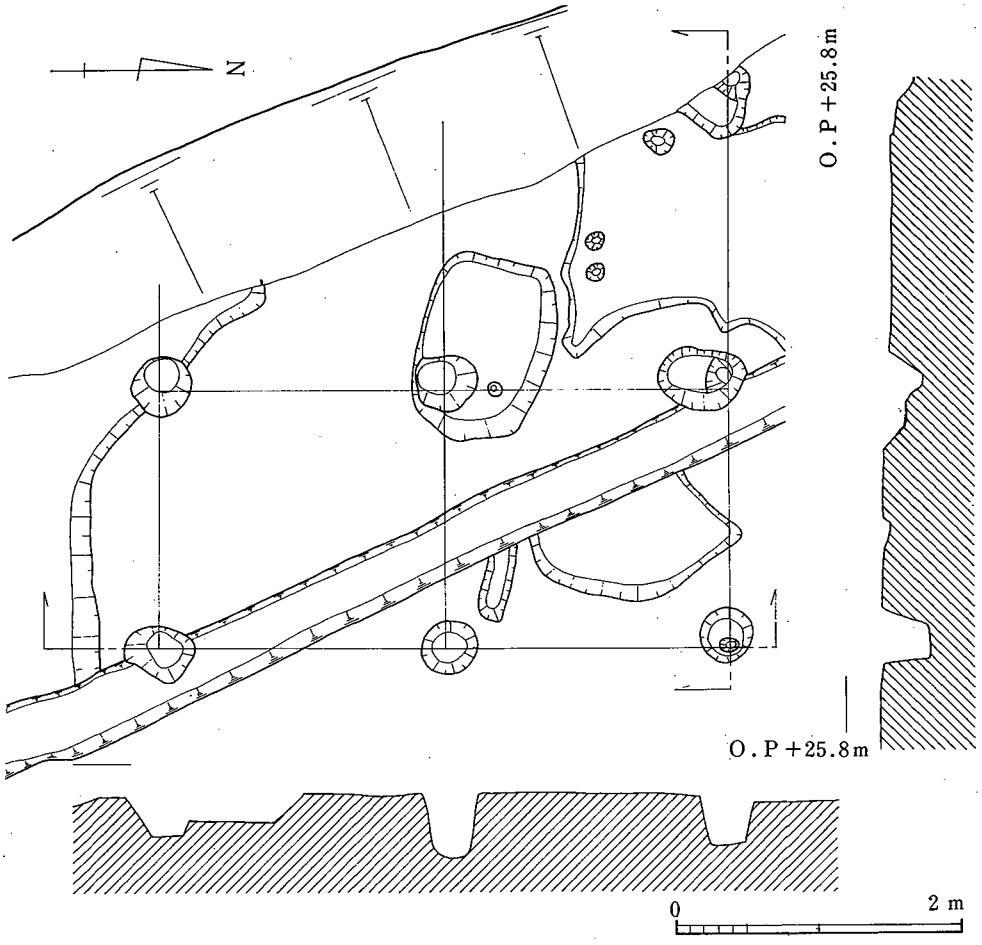


図7　掘立柱建物　SB－303

井戸　SE-301

調査地K－4区で検出した素掘りの井戸である。掘形の平面形は、径1.8mの円形を呈し、深さは、約4mを測る。底部は長径0.7m、短径0.5mとなるが、壁面は、ほぼ垂直に下底に至る。埋土は遺構面から深さ約1mまでは、灰褐～茶褐色砂質シルト（第2層）の堆積がみられ、以下の埋土はおおむね灰～暗灰色砂礫混じりシルト～砂礫である。井戸は、その廃棄にあたっては、完全に埋め戻されず、付近の諸遺構と共に完全埋没したようである。井戸からは、完形土器を含む30個体以上の土器群（瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿、瓦質甕）をはじめ木製品（箸、漆器椀底部片、容器の底板、仏具等）が出土している。

溝　SD-302

調査地J～L－3区で検出した幅0.4～0.9m、深さ0.1～0.15m、断面逆台形を呈する溝である。溝の方位は、3棟の建物方向の主軸にほぼ平行ないし直行し、各々の建物を区画するようにT字形に配されている。埋土は、茶褐色砂質シルト（第2層）である。遺物は瓦器椀が出土している。

溝　SD-316　（図版4-1）

調査地E～F－2～4区で検出した幅0.8～0.9m、深さ約0.4m、断面V字形ないしU字形を呈する北西～南東方向に走る溝である。埋土は上層が茶褐色砂質シルト（第2層）で下層が灰色シルトである。遺物は上層から瓦器椀が出土している。

溝　SD-321　（図版3）

調査地A～D－1～5区で検出した幅1～2.5m、深さ0.5～0.6m、断面形は深いレンズ状ないし逆台形を呈する南北溝である。埋土は、上層が灰黄～茶褐色砂質シルト（第2層）で下層は灰色粘土質シルトで炭化物が少量含まれる。遺物は、B－4区で下層から瓦器椀、土師器大皿、上層から、瓦器椀、白磁碗、C－2区で上層から瓦器小皿が出土している。

溝　SD-301

調査地区内でゆるやかに彎曲し、北～南東方向に走る溝である。幅1～3.5m、深さ0.4～0.5mを測り、断面レンズ状を呈する。埋土は、上層が旧耕作土、下層が緑灰色～青灰色シルト～粘土である。

遺物は、天目碗、青磁碗、染付碗、備前(？)擂鉢が出土している。

土壙　SK-301

調査地K－4区で検出した、長辺約3m、短辺約1.5m、深さ約0.1mの平面形が、長方形を呈する土壙である。建物SB－302内に複合して位置する。建物に関する付属施設の可能性も考えられるが、性格は明らかではない。遺物は瓦器椀、瓦器小皿が出土している。

方形周溝遺構　SX-301　（図版4-2）

調査地J－2区で検出した幅1～2m、深さ0.05～0.2mの断面レンズ状を呈する溝により、長辺約8m、短辺約6mの不整方形の区画を呈する遺溝である。埋土は、主に含砂礫暗紫灰色シルトであるが、溝が浅くなる南側周溝では、含砂礫浅灰色砂質シルト（第1層）が堆積する。区画内には、土壙状の落ち込みがみられるが、遺構の性格については明らかではない。遺物は北側周溝から瓦器椀が出土している。　（勝浦）

3. 出土遺物

出土遺物のほとんどは、中世日常雑器類である。以下、遺構出土の主な遺物について記述する。なお、時期区分については、付編「貝塚市出土の瓦器編年試案」に従うものとする。

掘立柱建物 SB-301 (図8、図版8)

Pit－312より瓦器埦（162）が出土している。内外面共に摩滅が著しいが、外面にわずかにヘラミガキの痕跡がみられる。口径14.9cm、器高5.3cmを測る。Ⅲ－Ⅰ期に該当する。

掘立柱建物 SB-302 (図8、図版8)

Pit－304より、瓦器埦（163）、瓦器小皿（166～169）、土師器小皿（170）が出土している。瓦器埦（163）は口径15.1cm、器高4.2cm、高台径4.3cmを測る。形態においては、器高の縮小化が進んでいる。外面のヘラミガキは施されず、内面ヘラミガキは、底部に連結輪状文と体部に10条前後の圏線ミガキで構成されている。Ⅲ－3期に該当する。

瓦器小皿は、体部が丸味をもち、横方向のナデにより外反する口縁部をもつもの（166～168）と、平担な底部を持ち口縁部が短く外反するもの（169）がある。Ⅱ～2～Ⅱ－3期に該当する。

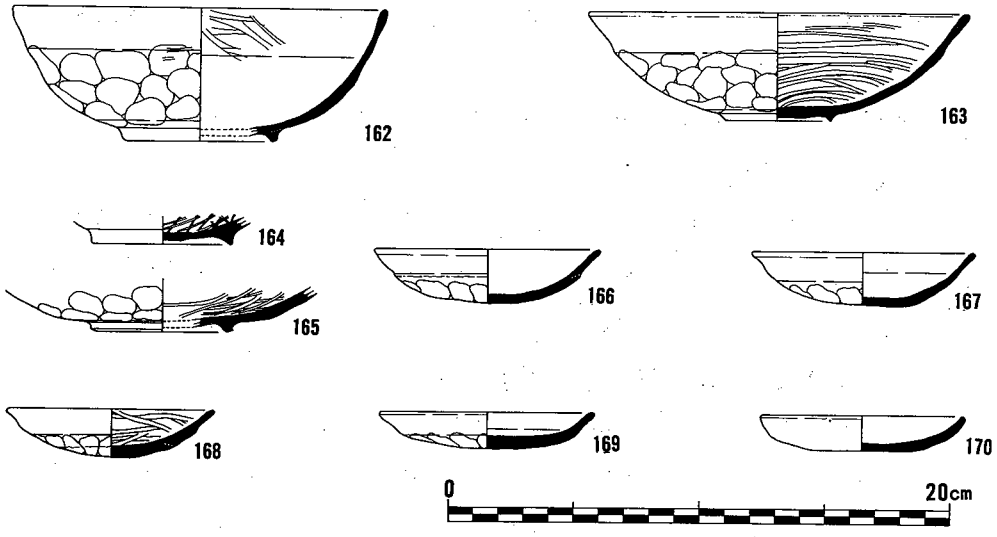


図8 掘立柱建物SB-301・SB-302・SB-303出土遺物

Pit-304(163.166～170)、Pit-312(162)、Pit-315(165)、Pit-322(164)

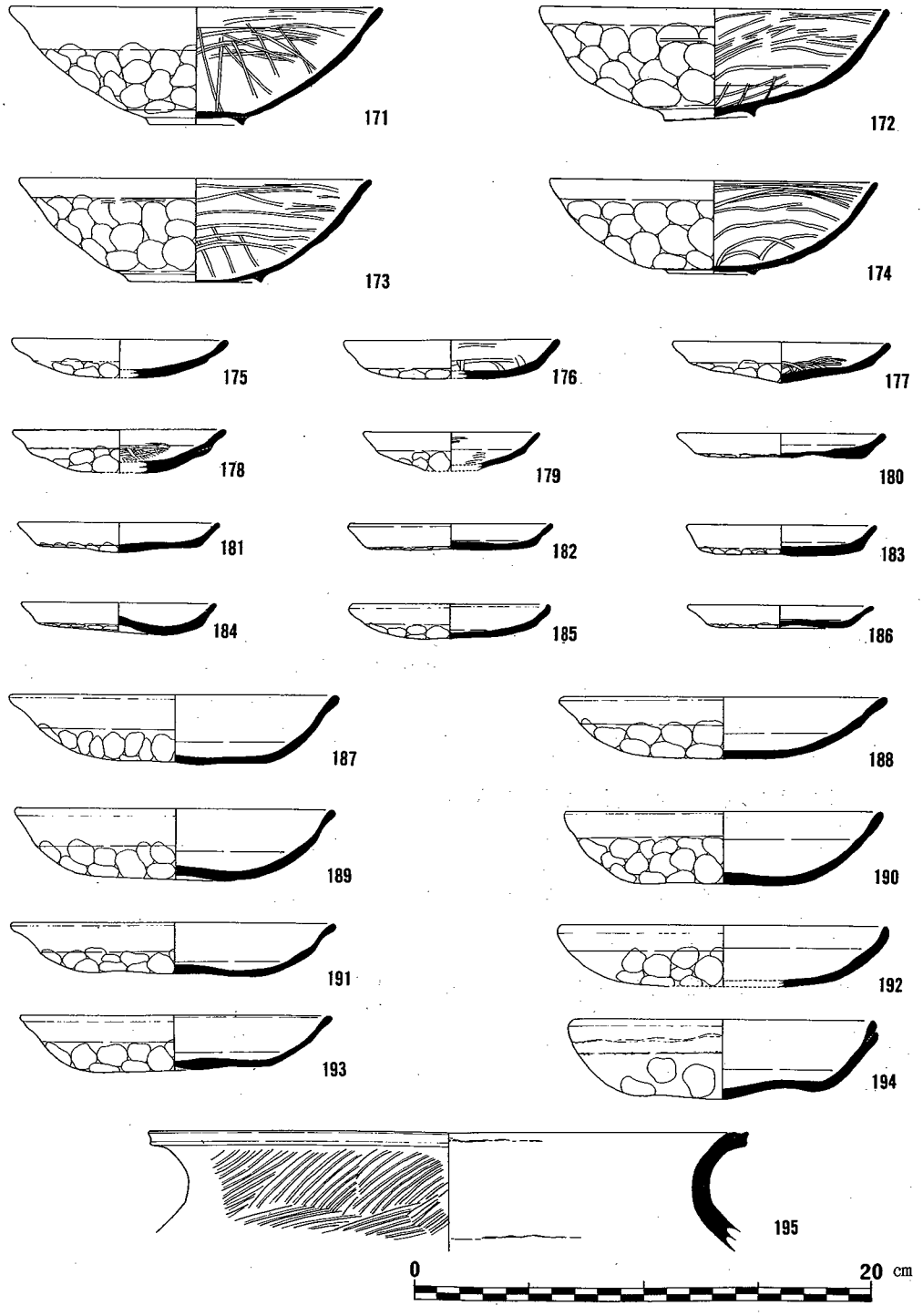


図9　井戸　ＳＥ-301　出土遺物

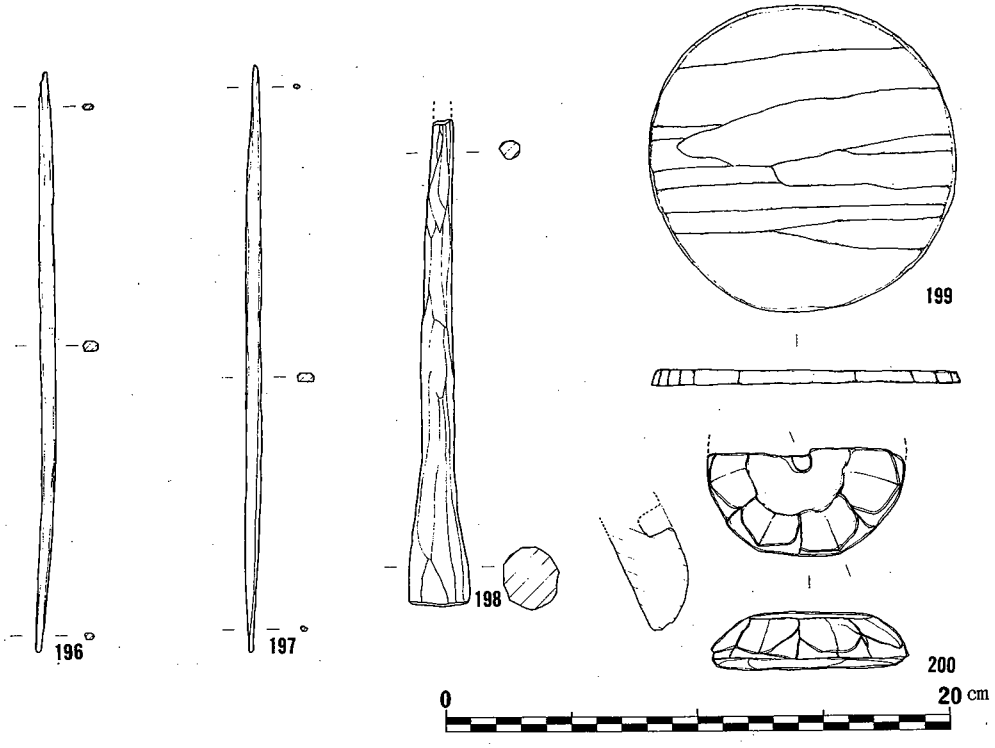


図10　井戸　ＳＥ-301　出土遺物

掘立柱建物　SB-303　(図8)

Ｐｉｔ－３２２より瓦器椀（164)、Ｐｉｔ－３１５より瓦器椀（165）が 出土している。これらは共に底部片であり、高台径5.7cmを測る。内面底部には斜格子文が施されている。Ⅲ－１～Ⅲ－２期に該当する。

井戸　SE-301　(図9・10、図版8～10)

埋土各層より、瓦器椀（１７１～１７４)、瓦器小皿（１７５～１７９)、土師器小皿（１８０～１８６)、土師器大皿（１８７～１９４)、瓦質甕口縁部片（１９５)、木製品（196～202）等が出土している。

瓦器椀は、外面ヘラミガキの施されているもの（172 ・ 173）とヘラミガキの施されていないもの（171 ・ 174）がある。内面ヘラミガキは、底部に平行線文（171 ・ 173)、斜格子文（１７２)、連結輪状文（１７４）が施される。内面体部はいずれも粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ－１～Ⅲ－３期に該当する。

瓦器小皿（176 ・ 179）は内面にヘラミガキが施されている。Ⅲ－１～Ⅲ－２期に該当

する。

土師器小皿は、平坦な底部をもち、横方向のナデにより口縁部が短く外反するもの（180 ～ 184・186）と、体部が緩やかな丸味をもち口縁端部がつまみ上げ風のもの（185）がある。Ⅲ－２～Ⅲ－３期に該当する。

土師器大皿は、口縁部が横方向のナデにより外反するもの（187 ～ 189・191 ～ 193）と、口縁端部直下で上方に屈曲するもの（190 ・ 192 ・ 194）がある。Ⅲ－２～Ⅲ－３期に該当する。

溝　SD-302　（図14）

瓦器椀（250・251）、瓦器小皿（117）が出土している。瓦器椀はいずれも底部片であり、高台形は（250 ・ 251）が4.0cm、（252）が5.1cmを測る。内面底部には、連結輪状文（250 ・ 251）、斜格子文（252）が施されている。Ⅲ－１～Ⅲ－３期に該当する。

溝　SD-316　（図14）

瓦器椀口縁部片（247）が出土している。外面ヘラミガキは施されず、内面は、密な圏線ミガキが施されている。Ⅲ－２期に該当する。

溝　SD-321　（図11・12、図版11～13）

埋土である灰色シルト層より瓦器椀（201 ～ 212）、土師器大皿（230 ～ 232）が出土している。

瓦器椀は、外面にヘラミガキが施されているもの（201 ～ 209）と施されていないもの（210 ～ 212）がある。内面ヘラミガキは、器面調整として機能しており内面底部でのヘラミガキの文様化はみられない。Ⅱ－３～Ⅲ－１期に該当する。

土師器大皿はいずれも、体部が緩やかに丸味をもち、口縁端部直下で鋭く屈曲し、立ち上がる形態を示す（230 ～ 232）。Ⅱ－３～Ⅲ－１期に該当する。

また、暗褐色砂質シルト層（第２層）から瓦器椀底部片（234）、瓦器小皿（213～229）、白磁碗口縁部片（233）等が出土している。（234）は、高台径4.4cmを測る。内面底部には平行線文が施されている。

瓦器小皿はその形態がヴァラエティーに富んでおり、（213 ～ 215）は、口径・器高において、資料中で第１位的な形態をとる。

溝　SD-301　（図13、図版14）

埋土である緑灰～青灰色シルト～粘土層から、青磁碗（236・239）、染付碗（235・240）等が出土している。

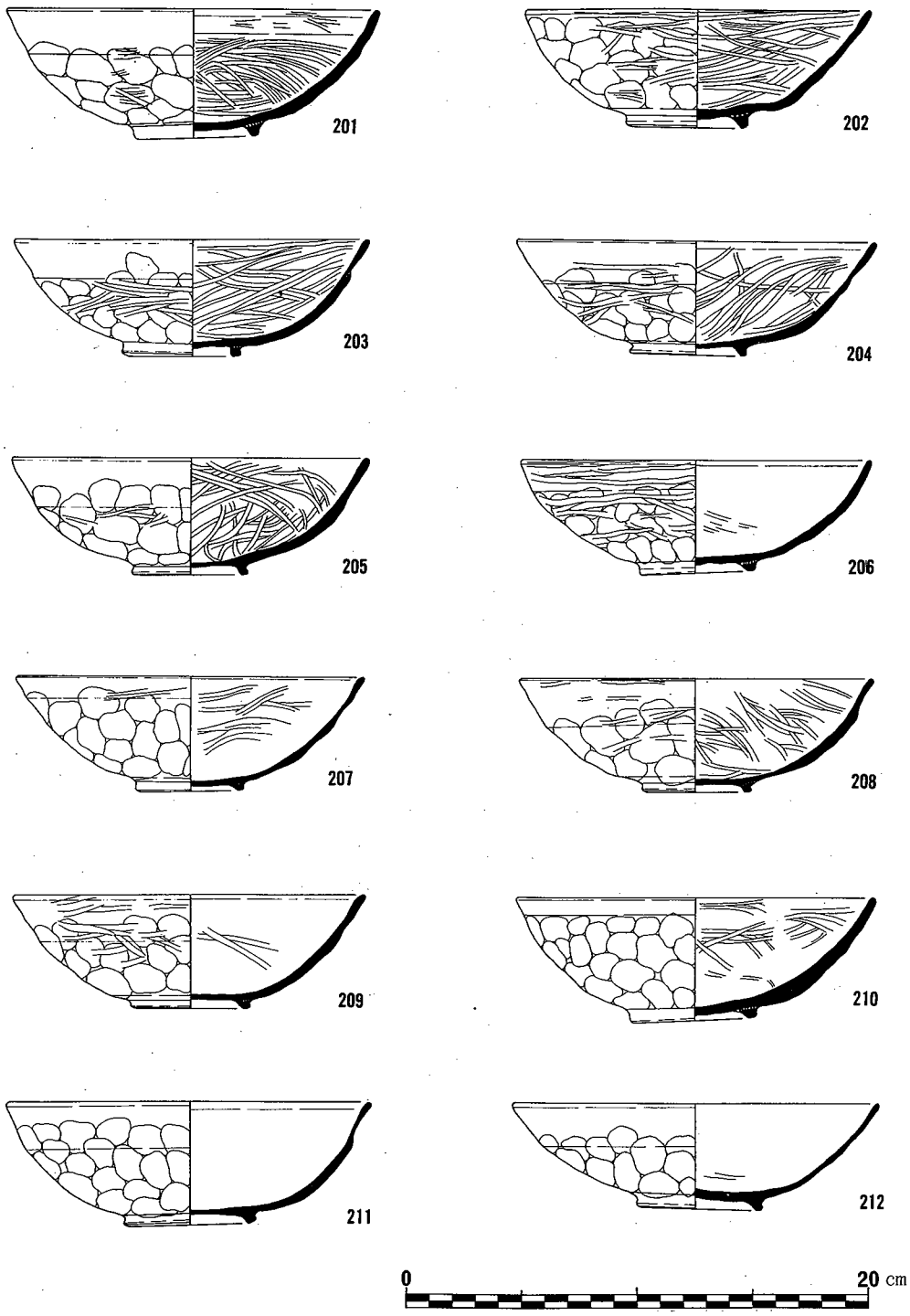


図11　溝　ＳＤ-321　出土遺物

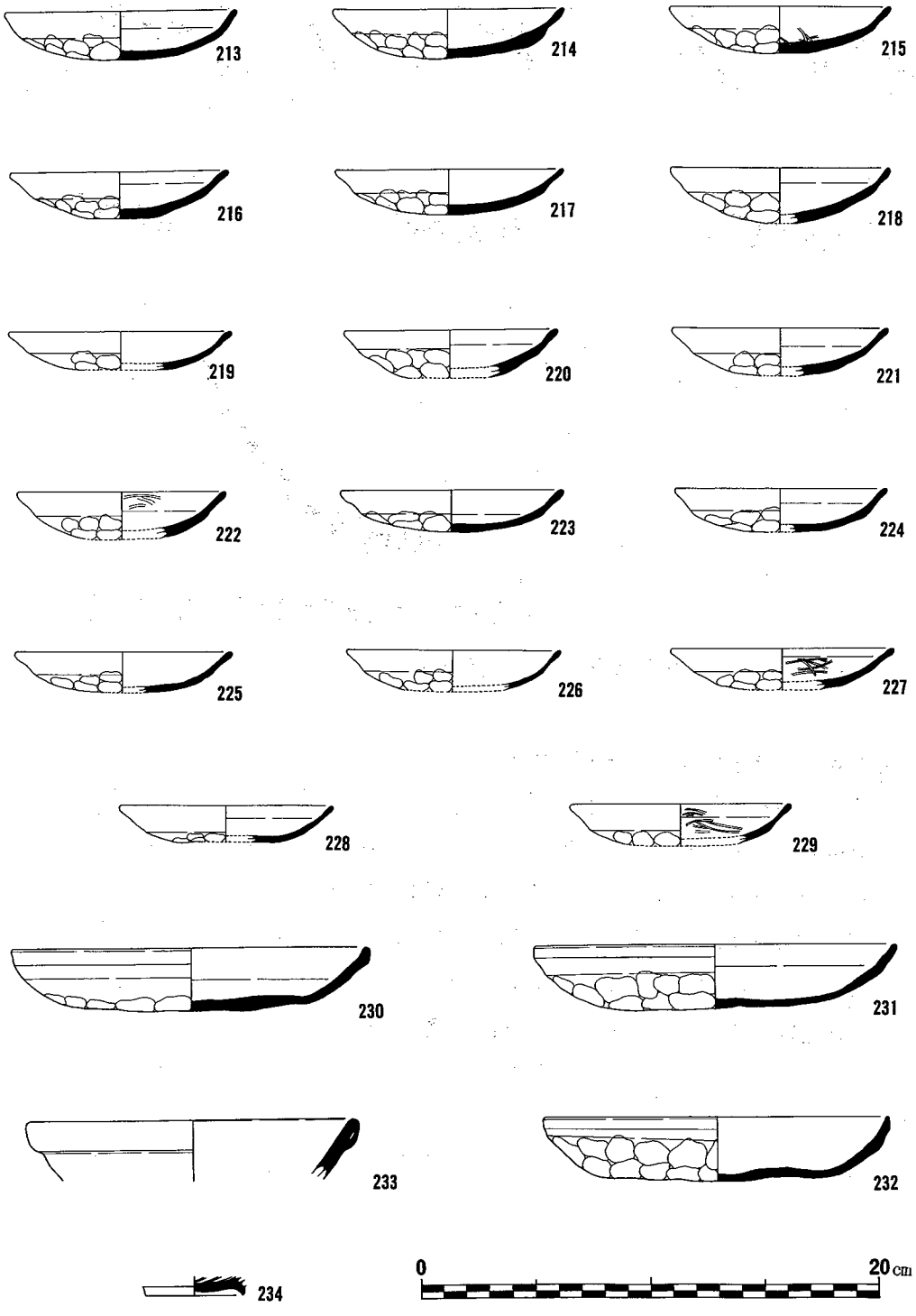


図12　溝ＳＤ-321　出土遺物

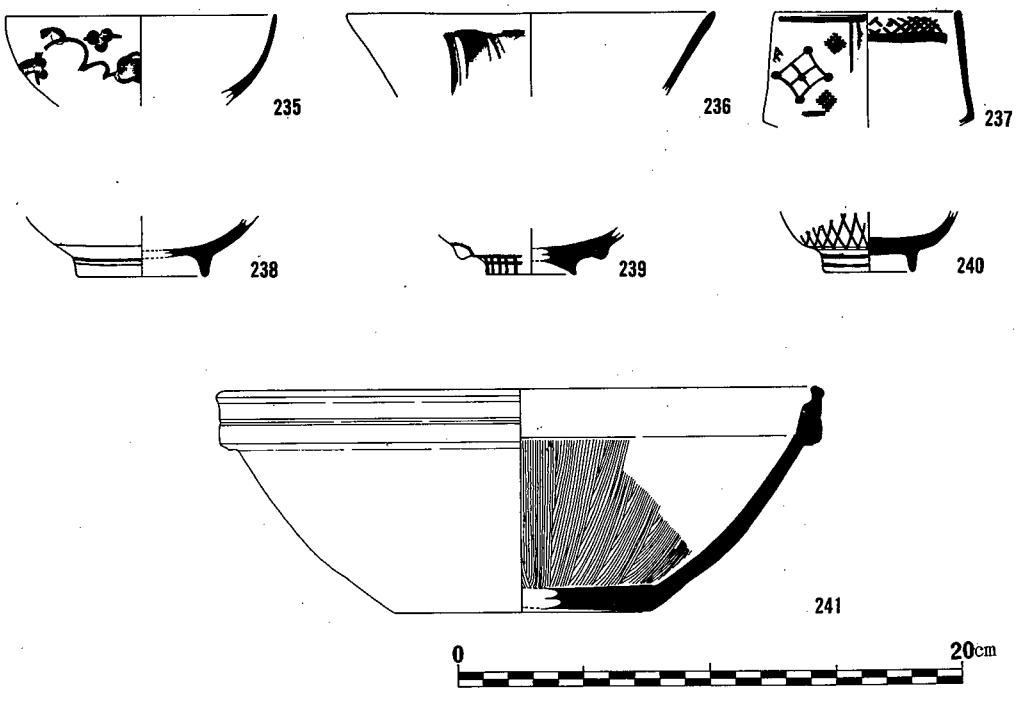


図13　溝ＳＤ-301　出土遺物

土壙　SK-301　（図14、図版13・14）

瓦器椀（244 ～ 246）、瓦器小皿（254 ～ 263）、土師器小皿（264）が出土している。

瓦器椀は、外面にヘラミガキは施されない。内面底部は、平行線文（245）、連結輪状文（244 ・ 246）が施されている。Ⅲ－２～Ⅲ－３期に該当する。

瓦器小皿は 形態がヴァラエティーに富み、（254 ・ 256 ・ 258 ・ 259）は内面にヘラミが施されている。Ⅲ－２～Ⅲ－３期に該当する。

方形周溝遺構　SX-301　（図14、図版13）

周溝埋土である 暗紫灰色シルト層から、瓦器椀（242）、瓦器小皿（248）が出土している。

瓦器椀（242）は 内外面共に摩滅しており、調整は不明である。口径16.2cm、器高5.85cm、高台径5.2cmと、各々が高い数値を示すが、高台は断面三角形の低平化したもので、器壁は薄い。Ⅲ－Ⅰ期に該当する。

包含層

前述の13世紀の遺構面の上面に層厚0.25～0.45ｍで堆積する第１層および第２層から

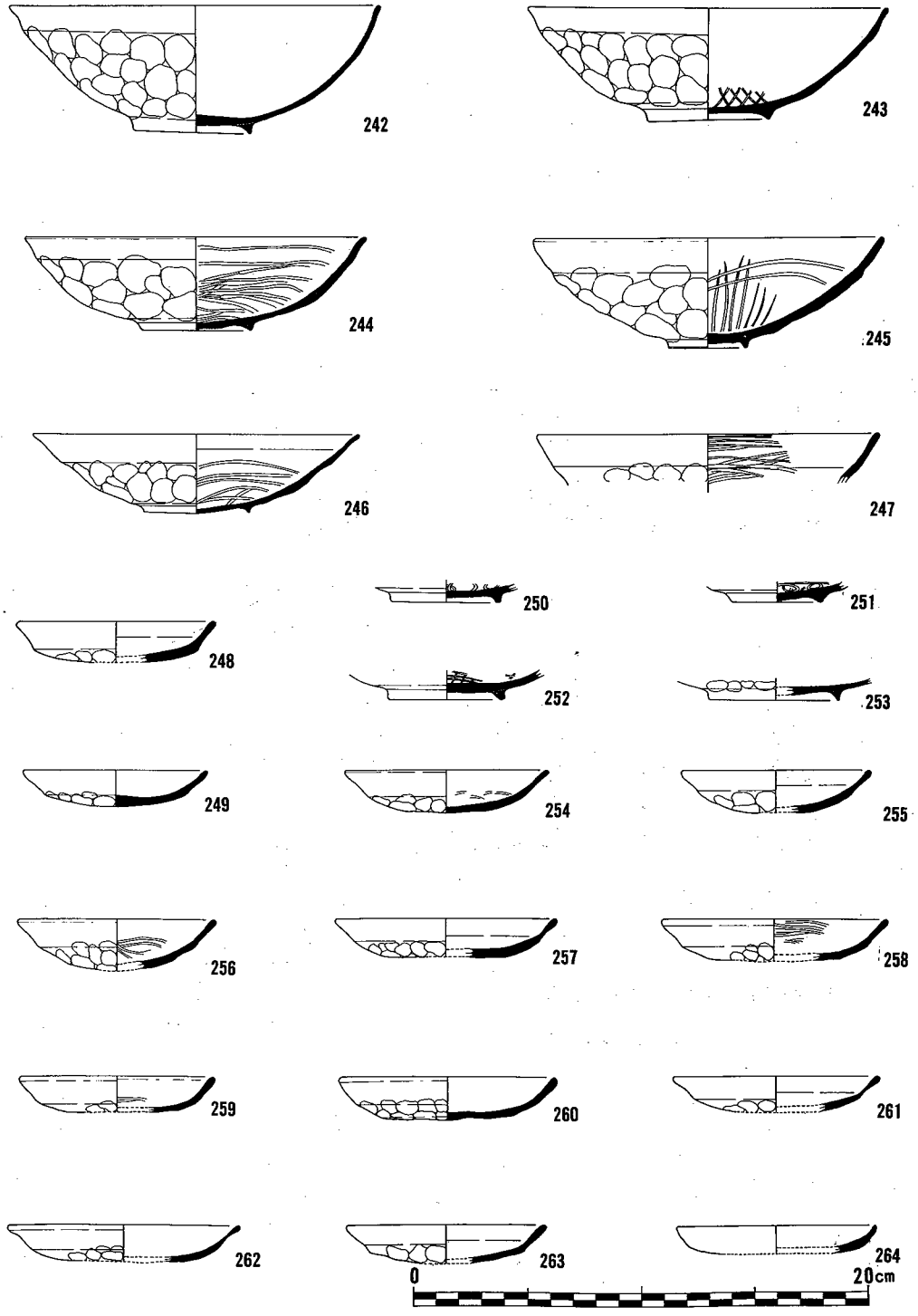


図14　溝・土壙・方形周溝遺構出土遺物

ＳＤ-302(249・250～252)、ＳＤ-316(247)、ＳＫ-301(244～246・254～264)、ＳＫ-302(243)、ＳＸ-301(242・248・253)

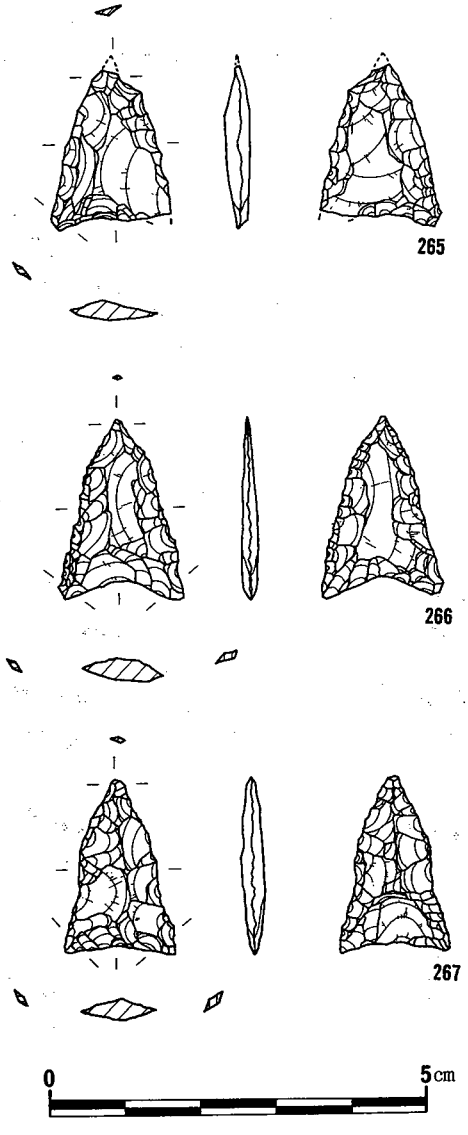


図15 包含層出土遺物

多くの遺物が出土している。以下、それらの遺物の中で、特に石器遺物について記述することにする。なお、用語および使用細部調整用語は、赤澤威、小田静夫、山中一郎(1980)に従うものとする。（註１）

凹基無茎石鏃（図15、図版14）

石材はすべてサヌカイトである。(265・267)は素材の性状については明らかではないが、(266) は横形剝片を素材とする。(265・266)は先行剝離面および主要剝離面が残存する。細部調整は、(265・266) は 平形・薄形、浅形両面細部調整による整形が施され、(267)は平形・薄形、深形両面細部調整が施されている。技術的特徴として、①調整をうけず整形により器体が整えられている。(265・266)②尖端部の形態がやや凹形に作出されている(266・267)などのことからいずれも、縄文時代晩期～弥生時代前期に属するものと考えられる。（註２）

(265)、長 2.05cm、幅 1.60cm、厚 0.35cm。
(266)、長 2.28cm、幅 2.36cm、厚 1.62cm。
(267)、長 2.28cm、幅 1.50cm、厚 0.33cm。

（勝浦）

註１： 赤澤　威・小田静夫・山中一郎（1980)、『日本の旧石器』、東京。
註２： 山中一郎（1982)、「石器遺物」、『長原遺跡発掘調査報告II』、大阪。
pp158～204。の指摘がある。

4. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の集落跡の一画を検出することができた。主な遺構の推定存続時期は表1に示すとおりである。調査地東部で南北に走る段ＳＸ－302と溝ＳＤ－321は、ほぼ坪境線に位置するものと考えられる。段ＳＸ－302付近での包含層の堆積状況は第2層の茶褐色砂質シルト層の堆積がみられず、第1層の黄橙～黄褐色砂質シルト層が段に沿って西へ落ち込んでおり、第2層削平時もしくは、その後に段ＳＸ－302が造られたものと思われ、溝ＳＤ－321より後出のものと考えられる。遺構の密度が調査地西部で集中することから、溝ＳＤ－321は、坪境溝であると同時に、集落の東限を示すものかもしれない。

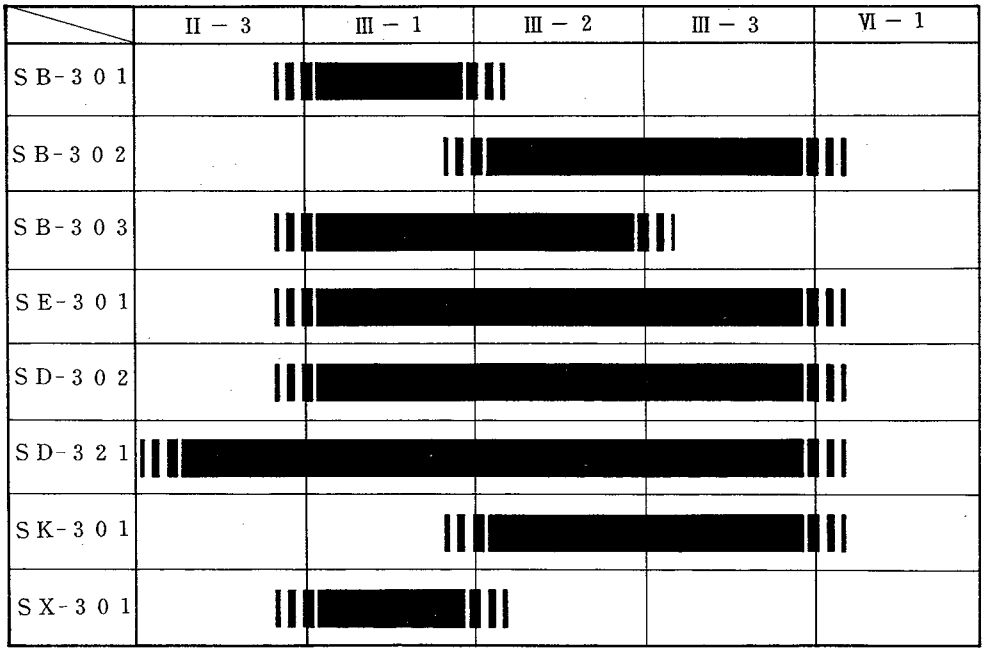


表1 遺構時期推定表

居住遺構は、調査地西部に位置する。建物ＳＢ－301、ＳＢ－302、ＳＢ－303は各々の主軸方向が若干の差異を示すが、溝ＳＤ－302に区画されていること。また出土遺物に時期差があまりみられないことから、単一時期での並立が考えられる。建物群は①重複関係がみられない。②柱間寸法は、ほぼ基準尺（一尺約30cm）の完数倍で得られるが、柱配置にばらつきがみられる。③建物構造において、間仕切り、庇などがみられず、柱を省略することで間取りの変更を行っている。などのことから、集落としての継承的な発展はみら

れず、その経営は不安定であったと考えられる。また、出土遺物が日常雑器類に限られていることなども、その経営階級層を特徴づける要素と考えられる。建物群は、調査地区外へ広がり、建物群の全容については、明確にし得なかったが、王子遺跡第２次調査で検出した建物群との比較において、本調査地区の居住形態は、前哨的な様相を示している。

居住地内外での人的移動などの問題が残るが、今後、資料の蓄積により中世集落の様相も、次第に明らかになると思われる。（勝浦）

付編）

貝塚市出土の瓦器編年試案

勝 浦 康 守

1．はじめに

瓦器椀研究において、資料を統計的に分析し、議論しようとする試みは、1961年、稲垣晋也による編年研究（1961）にはじまる（註１）。以来、白石太一郎(1969，1975，1977)が 瓦器椀の生産と流通について論を進め（註２）、さらに橋本久和が瓦器椀の地域色と分布圏（1980ａ）を提示し（註３）、樋口吉文（1978)、尾上実（1978，1983)、鈴木秀典(1982)らが、それぞれ畿内各地域における瓦器椀の編年研究の成果を発表している（註４）。

編年研究は、当初から、瓦器椀の形態と調整との差異を結びつけて論じようという方向を目指していた。それは、法量の矮小化とヘラミガキ調整の粗略化が瓦器椀の型式変化に一貫してみられる傾向であると考えられたからである。また、畿内を中心とする中世遺跡において、多量かつ、普遍的にみられる瓦器椀の編年研究を先学が志向したことは、とりわけ遅れていた中世の遺構・遺物の研究に対し、考古学的立場から先駆的な役割を担ったものであった。

本稿においては、貝塚市域出土の資料を取り扱い編年を試みることとするが、それは、貝塚市王子遺跡発掘調査（1986)（註５）での 検出遺構の時期推定および、遺構の変遷を追うための一手段であり、また、一地方一地域の日常雑器類を通して中世社会の様相を考えるための基礎作業である。

2．分析資料と分析

本稿で取り扱う資料は、貝塚市域に所在する遺跡の中で、沢所在の澱池遺跡(1984)、沢城跡（1986)、地蔵堂および王子所在の王子遺跡（1986）の出土遺物のうち、320点についてである（註６）。遺物の内訳は、瓦器椀131点、瓦器小皿62点、土師器小皿 102点、土師器大皿25点である。

貝塚市域で主に出土する瓦器椀は、橋本久和（1980ａ）が称する和泉型にあたる。瓦器

埦の編年方法は、先学の諸編年と同様、口径・器高・高台径の縮小化とヘラミガキ調整の差異で変化の流れを追うものである。一方、瓦器小皿，土師器小皿・大皿の型式変化は顕著に観察されず、また、調査時において、単一時期の遺構での瓦器埦との共伴例に乏しく一括遺物としてとらえられる場合が多いことなどから、その編年作業は容易なことではない。しかしながら、橋本久和（1980ｂ）は、瓦器埦との共伴において、土師器皿に対しても、口径・器高の分析を行いうる見通しを得ている（註７）。そして、本稿においても、総資料に対する口径・器高の分析は重要な位置を占めるものであり、今回５㎜毎の間隔で階級設定を試みた（表１）。瓦器小皿，土師器小皿・大皿は、この階級差と瓦器埦との 共伴例をもとにして編年を試みることにした。

なお、時期区分および、その実年代観については、同じ和泉型瓦器埦の編年を試みている鈴木秀典（1982）に基づくものとした。（註８）。

３．分析結果

Ｉ　期

現在、貝塚市域での出土例はない。大阪市長原遺跡出土例（1982）によると、外面は４～５分割の規則性をもつヘラミガキ（波状ミガキ）が施され、ミガキ調整以前にヘラケズリが施される。内面は、規則性をもつヘラミガキが全体に緻密に施される。口径・器高・高台径について概観してみると、口径15.5～16.5cm、器高6.1～6.5cm、高台径6.6～8.0cmの間に分布し、特に、器高・高台径に関しては他の時期に類をみないものである。

Ⅱ－１期

現在、貝塚市域での出土例はない。大阪市長原遺跡出土例（1982）によると、外面は波状ミガキの形態には変化はみられないが、ミガキの緻密性が薄れ、その密度が低下しはめる。それは、内面ヘラミガキにも同様にみうけられる。また、内面底部でヘラミガキの文様化がみられはじめる。口径・器高・高台径が安定し、プロポーションが画一化されつつある。

Ⅱ－２期

瓦器埦は５点、全体の 3.8％を占める。口径14.6～15.5cm、器高5.1～6.0cm、高台径5.1～6.5cmの間に分布する。平均口径15.2cm、平均器高5.3cm、平均高台径5.7cmである。澱池遺跡（1984）ＳＥ－１出土例（１～５）は、口径・器高・高台径の各々が高い数値を示し、そのプロポーションは資料中で第１位的である。外面ヘラミガキは、波状ミガキの形

態が崩れ、分割・規則性の意識が薄れている。同時に、ミガキの密度の低下も進行している。内面ヘラミガキは、前面密に施されているが規則性はみられない。貝塚市域では現在、最古の型式である。

II－3期

瓦器埦は10点、全体の7.6%をしめる。口径14.6～15.5cm、器高4.6～6.0cm、高台径5.1～5.5cmの間に分布する。平均口径15.2cm、平均器高5.3cm、平均高台径5.2cmである。平均値でみるII－2期からII－3期への縮小率は、高台径で 8.8%の縮小がみられるだけである。外面ヘラミガキは、波状ミガキの形態が完全に崩れ、分割・規則性はみられない。ミガキの密度の低下はさらに進行している。内面ヘラミガキは、ミガキの密度は低下しているが、依然として内面全体に施され、器面調整として機能している。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＤ－321（202～204）がある。

瓦器小皿は３点、全体の 4.9%を占める。口径 9.6～10.0cm、器高 2.1～2.5cmの間に分布する。平均口径 9.9cm、平均器高 2.1cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＤ－321（213 ～ 215）がある。

土師器大皿は３点、全体の12%を占める。口径 15.1～16.0cm、器高 2.6～3.0cmの間に分布する。平均口径15.5cm、平均器高2.85cmである。出土例として、王子遺跡（1986年）ＳＤ－321（230 ～ 232）がある。

III－1期

瓦器埦は20点、全体の15.2%を占める。口径 13.1～16.1cm、器高 4.6～6.1cm、高台径 3.1 ～ 6.0cmの間に分布し、口径 15.1～16.1cm（60%）、器高 4.6～5.0cm（70%）、高台径 4.6～5.0cm（70%）で集中する傾向がある。平均口径15.2cm、平均器高5.1cm、平均高台径 4.8cmである。平均値でみるII－3期からIII－1期への縮小率は、口径の変化はなく、器高 3.8%、高台径 7.7%であり、瓦器埦の形態変化に顕著な動きはみられない。外面ヘラミガキは、口縁部付近で単発的に施され、粗略化し尽くした感がある。また、ミガキの施されないものが出現する。内面ヘラミガキは、ミガキの密度の低下が進行するが器面調整として機能しているものと、内面底部にミガキの文様を施したものとがある。内面底部に 文様をもつものは 13点（65%）で出現時からすでに過半数を占める。文様の種類と割合は、斜格子文７点（52.8%）、平行線文４点（30.8%）、連結輪状文２点（15.4%）である。出土例として、澱池遺跡（1984）ＳＥ－２（２）、王子遺跡（1986）ＳＥ－301（171）がある。

瓦器小皿は12点、全体の19.7%を占める。口径9.1～10.5cm、器高1.6～2.5cmの間に分布する。平均口径 9.6cm、平均器高 1.6cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＤ—321（216・217）、ＳＥ－301（177）、ＳＫ－301（260）がある。

土師器大皿は２点、全体の８%を占める。口径 14.1～14.5cm、器高 2.6～3.0cmの間に分布する。平均口径 14.4cm、平均器高 2.7cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－301（187・188）がある。

Ⅲ－２期

瓦器椀は 29点、全体の 22.1%を占め、量的ピークに達する。口径14.1～16.1cm、器高4.1～5.0cm、高台径 3.6～6.0cmの間に分布し、口径 14.1～15.0cm（82.7%）、器高4.6～5.0cm（82.7%）、高台径 4.1～5.0cm（69%）で集中する傾向がある。平均口径 14.8cm、平均器高 4.7cm、平均高台径 4.6cmである。平均値にみるⅢ－１期からⅢ－２期への縮小率は、口径 6.7%、器高 7.4%、高台径 4.2%であり、比較的停滞的であった瓦器椀の形態変化に動きがみられはじめる時期である。外面ヘラミガキの施されるものは存在しない。内面ヘラミガキは、内面底部に文様化されたミガキと、それを取り巻くように体部に施される13～15条の圏線ミガキとの組み合わせで構成される。この構成パターンは、以後、Ⅳ－２期に至るまで続く。内面底部に文様をもつものは、28点（96.6%）で、圧倒的存在を示す。文様の種類と割合は、斜格子文９点（32.1%）、平行線文２点（7.1%）、連結輪状文16点（57.2%）、渦巻状文１点（3.6%）で、連結輪状文が斜格子文に取って代わる。出土例として、澱池遺跡（1984）ＳＥ－５（４・14）がある。

瓦器小皿は 15点、全体の 24.6%を占める。口径 8.6～9.5cm、器高 1.6～2.5cmの間に分布する。平均口径 9.1cm、平均器高 1.8cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＤ－321（223）がある。

土師器小皿は４点、全体の 3.9%を占める。口径 9.1～10.0cm、器高 1.1～2.0cm の間に分布する。平均口径 9.4cm、平均器高 1.6cmである。出土例として、澱池遺跡（1984）ＳＥ－２(16)、ＳＥ－５(76・78）がある。

土師器大皿は 13点、全体の 52%を占め、量的ピークに達する。口径13.1～14.0cm、器高 2.1～3.0cmの間に分布する。平均口径 13.8cm、平均器高 2.6cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－301（189・190）がある。

Ⅲ－３期

瓦器椀は 20点、全体の15.2%を占める。口径12.6～15.5cm、器高4.1～4.5cm、高台径

2.6 ～ 5.5cmの間に分布し、口径 14.1～15.5cm (95%)、高台径 3.6～5.0cm (85%) で集中する傾向がある。平均口径 13.9cm、平均器高 4.2cm、平均高台径 4.2cmである。平均値にみる Ⅲ－２期からⅢ－３期への縮小率は、口径 6.1%、器高 10.6%、高台径 8.7%である。口径に比して器高の縮小率が優位であり、器高縮小に伴う法量変化がみられる。Ⅲ期を通して、瓦器椀の形態変化に急激な変化はみられないが、着実に縮小化をたどっている。内画ヘラミガキは、圏線ミガキの密度が低下しはじめる。内面底部の文様と割合は、斜格子文４点 (22.1%)、平行線文３点 (16.7%)、連結輪状文10点 (55.6%)、渦巻状文１点 (6.6%) である。Ⅲ－２期と比較して、資料体数に差があり 明確ではないが、斜格子文が減少するのに対して連結輪状文は、以前として過半数を保っている。出土例として、王子遺跡 (1986) ＳＥ－２０１ (36)、ＳＥ－３０１ (246)、ＳＫ－３０１ (２４４) がある。

瓦器小皿は 22点、全体の 36.1%を占め、量的ピークに達する。口径 8.1～9.5cm、器高 1.1 ～ 2.0cmの間に分布する。平均口径 8.6cm、平均器高 1.6cmである。出土例として、王子遺跡 (1986) Ｐｉｔ－304 (167 ～ 169)、ＳＫ－301 (254) がある。

土師器小皿は 30点、全体の 29.1%を占める。口径 8.1～9.0cm、器高 1.1～2.0cmの間に分布する。平均口径 8.5cm、平均器高 1.5cmである。出土例として王子遺跡 (1986) ＳＥ－301 (180～183・185・186) がある。

土師器大皿は４点、全体の 16%を占める。口径 12.1～13.0cm、器高 2.6～3.5cmの 間に分布する。平均口径 13.0cm、平均器高 2.9cmである。出土例として、王子遺跡 (1986) ＳＥ－301 (193) がある。

Ⅳ－１期

瓦器椀は 22点、全体の 16.8%を占める。口径 12.1～14.0cm、器高 2.1～3.5cm、高台径 2.5～4.0cmの間に分布し、口径 12.6～13.0cm (54.5%)、高台径3.1～4.0cm (68.1%) で集中する傾向がある。平均口径12.2cm、平均器高 3.1cm平均高台径 3.2cmである。平均値にみるⅢ－３期からⅣ－１期への縮小率は、口径12.2%器高26.2%、高台径23.9%で、Ⅲ－３期までの安定した変化率と比較してⅢ－３期からⅣ－１期への変化率は極めて急激である。口径の変化率は、Ⅲ期を通じての変化率の２倍にあたり、器高・高台径に関しては２倍以上の数値をとる。瓦器椀の形態変化の中で一大画期点となる。内面ヘラミガキは、４～５条の圏線ミガキが施され、ミガキ密度の低下は進行している。内面底部の文様と割合は、平行線文１点 (6.7%)、連結輪状文９点 (60%) 渦巻状文５点 (33.1) である。斜格子文が消失し、新たに渦巻状文が増加の傾向にある。出土例として、王子遺跡 (1986)

ＳＥ－201（43・46・47）がある。

瓦器小皿は６６点、全体の 9.8%を占める。口径 7.6～8.0cm、器高 1.1～2.0cmの間に分布する。平均口径 7.7cm、平均器高 1.5cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－201（48・49・50）がある。

土師器小皿は 41点、全体の 39.8%を占め、量的ピークに達する。口径 7.1～8.5 cm、器高 1.0～2.0cmの間に分布する。平均口径 8.0cm、平均器高 1.4cm である。出土例として王子遺跡（1986）ＳＥ－201（53・57・61）

Ⅳ－２期

瓦器椀は17点、全体の13%を占める。口径11.1～12.0cm、器高2.6～3.5cm、高台径2.6～3.5cmの間に分布し、口径 11.1～11.5cm（76.4%）、器高 2.6～3.0cm（47%）、高台径 2.6 ～ 3.0cm（90%）で集中する傾向がある。平均口径 11.4cm、平均器高 2.9cm、平均高台径 2.8cmである。平均値にみるⅣ－１期からⅣ－２期への縮小率は、口径 6.6%、器高 6.5%、高台径 12.5%で、再び、安定した変化率に戻る。内面ヘラミガキは、文様と、圏線ミガキで構成されるパターンの最終段階である。また、高台の消失したものが出現する。内面底部の文様と種類の割合は、平行線文１点（9.1%）、連結輪状文４点（36.4%）、渦巻状文６点（54.5%）である。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－202（86）Ｐｉｔ－ 245（112）がある。

瓦器小皿は３点、全体の 4.9%を占める。口径 7.1～8.0cm、器高 1.0～1.5cmの間に分布する。平均口径 9.6cm、平均器高 1.2cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－201（50）がある。

土師器小皿は 18点、全体の 17.5%を占める。口径 6.6～8.0cm、器高 1.0～2.0cmの間に分布し、平均口径 7.1cm、平均器高 1.3cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－201（60・63）、ＳＥ－202（88・89・91）がある。

土師器大皿は２点、全体の８%を占める。口径 11.6～12.0cm、器高 1.6～2.5cmの間に分布する。平均口径 11.65cm、平均器高 1.9cmである。出土例として、澱池遺跡（1984）ＳＫ－10（８）がある。

Ⅳ－３期

瓦器椀は４点、全体の 3.1%を占める。口径 10.6～11.0cm、器高 2.6～3.0cm、高台径 2.6～3.5cmの間に分布する。平均口径 10.85cm、平均器高 2.8cm、平均高台径 2.8cmである。平均値にみる Ⅳ－２期から Ⅳ－３期への縮小率は、口径 4.8%、器高 3.8%、高台

径は変化なしであり、変化率は極めて小さく、瓦器埦の形態変化は、ほぼ停止状態になる。内面ヘラミガキは、底部の文様が消失するものが出現する。また、体部と底部のミガキが一体化したような3～4重の輪状ミガキが施される。出土例として、澱池遺跡（1984）ＳＥ－３（２）、王子遺跡（1986）ＳＥ－202（87）がある。

土師器小皿は９点、全体の 8.7%を占める。口径 6.5～7.0cm、器高 1.1～1.5cmの間に分布する。平均口径 6.7cm、平均器高 1.3cmである。出土例として、王子遺跡（1986）ＳＥ－202（90）がある。

Ｖ　期

瓦器埦は４点、全体の 3.1%を占める。口径 10.1～11.0cm、器高 2.6～3.5cmの間に分布し、高台をもつものは存在しない。平均口径 10.7cm、平均器高 2.8cmである。平均値にみるⅣ－３期からＶ期への縮小率は、口径 1.4%、器高変化はなしで、形態変化はみられない。内面ヘラミガキは、ミガキが全く施されないものが出現する。焼成時における炭素吸着も不十分である。出土例として、沢城跡（1986）包含層（１）がある。

４．　結　論

今回、貝塚市域出土の資料について編年を試みた結果、Ⅱ－２期～Ｖ期に至る変化の流れを設定することができた。その中で、特に、瓦器埦の変化の流れに大きな２つの画期がみられた。一つは、Ⅲ－１期以降の内面底部でのヘラミガキの文様化であり、１つは、Ⅲ－３期とⅣ－１期の間でみる形態変化の大きな間隙である。

瓦器埦の内面底部にみるヘラミガキの文様は、楠葉型ではＩ期に、また、同じ和泉型瓦器埦が出土する大阪市長原遺跡でもすでにⅡ－１期にみられる。これらに対して、貝塚市域出土の瓦器埦は、Ⅲ－１期で文様化がみられ、それ以前の内面ヘラミガキは、器面調整として機能しているものである。このことは、貝塚市域出土瓦器埦の１つの特徴とみることができる。図１は、ヘラミガキ文様の変化を示したものである。各文様の変遷および各期での優劣関係がみられ、変化の仕方において２つのグループに分けられる。１つは斜格子文・平行線文組で、１つは、連結輪状文・渦巻状文組である。それは、前者が突然高い比率で出現し、以後、急速に減少するのに対して、後者の連結輪状文は、増加→安定→減少，渦巻状文は増加→(減少)という過程を踏まえて変化をみせる。内面底部に施されたヘラミガキの文様は、個々の文様が瓦器埦の新旧関係を左右するのではなく、各文様は独自に瓦器埦の変化の流れに存在する。瓦器埦の形態変化は、その出現時より直線的に進行するが、ヘラミガキの文様は直線的な動きの中で、各文様が時間的に重複しながら、その存

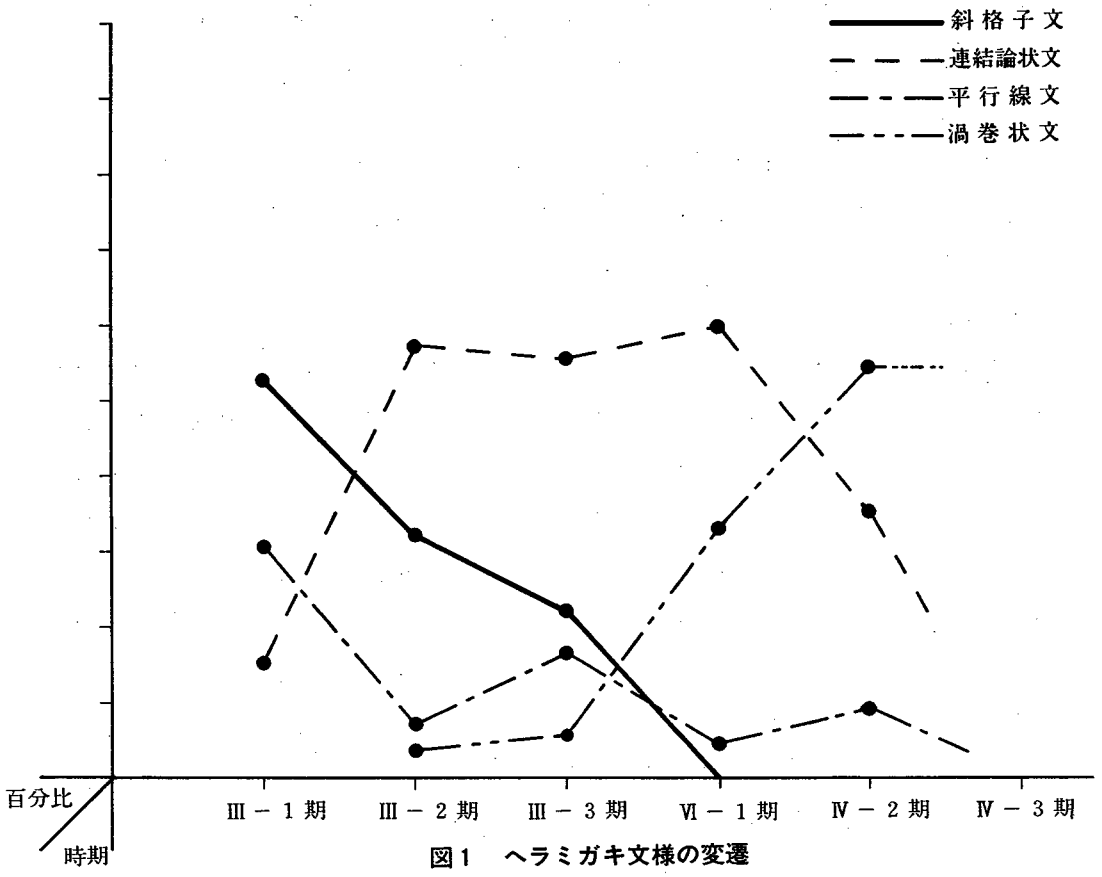


図1　ヘラミガキ文様の変遷

亡をみせ曲線的な動きをとる。すなわち、法量の矮小化という第一前提の下で、各文様をもつ瓦器椀は、各々が全く異なる系統の体制下で生産された可能性が考えられる。図2は、瓦器椀の時期毎の量的比率を示したものである。Ⅲ期該当の瓦器椀は、全体の52.7%を占め、爆発的な増加をみせる。また図6は、瓦器椀の口径・器高・高台径の度数分布を示したものである。量的増加の顕著なⅢ－1期～Ⅲ－3期の分布範囲は、広い範囲で重複しており、Ⅲ期該当の瓦器椀の形態は画一化の傾向がみられる。ここに、画一的大量生産、すなわち、大量消費商品としての瓦器椀の登場が想定される。また、Ⅲ－1期にみる斜格子文・平行線文の存在状況は、それらの文様をもつ瓦器椀の需要がピークもしくは、それを越えて減少に向かう時期にあたっていれことを示すものとし、この時期にはじめて、商品としての瓦器椀がもちこまれたと考えるのが妥当ではないかと思われる。

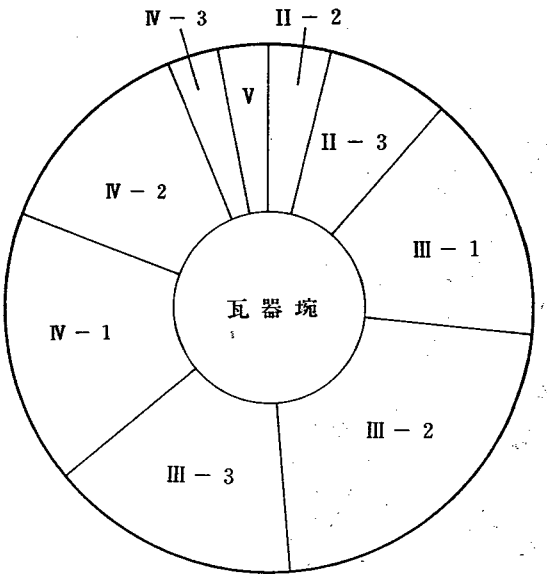


図2　瓦器椀の時期区分

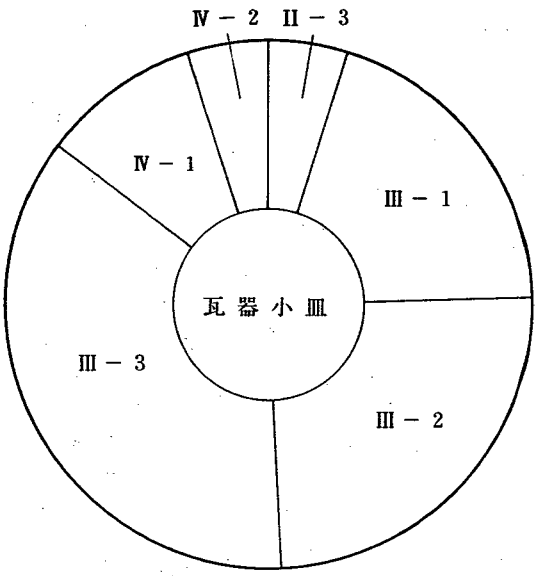


図3　瓦器小皿の時期区分

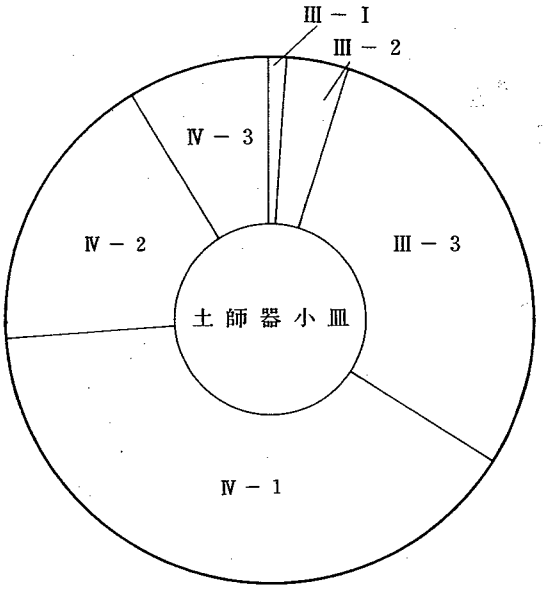


図4　土師器小皿の時期区分

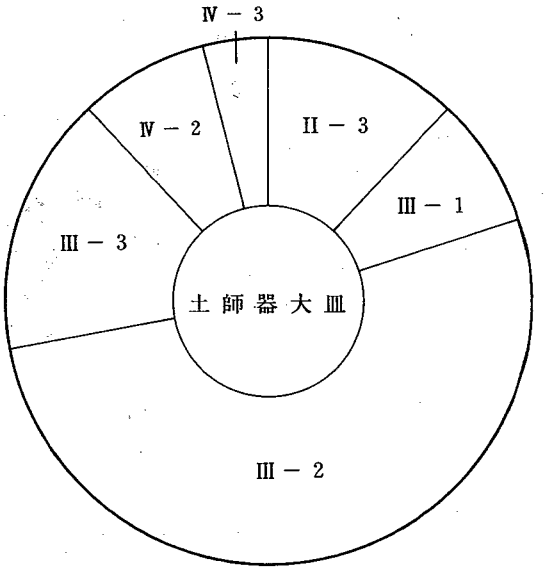
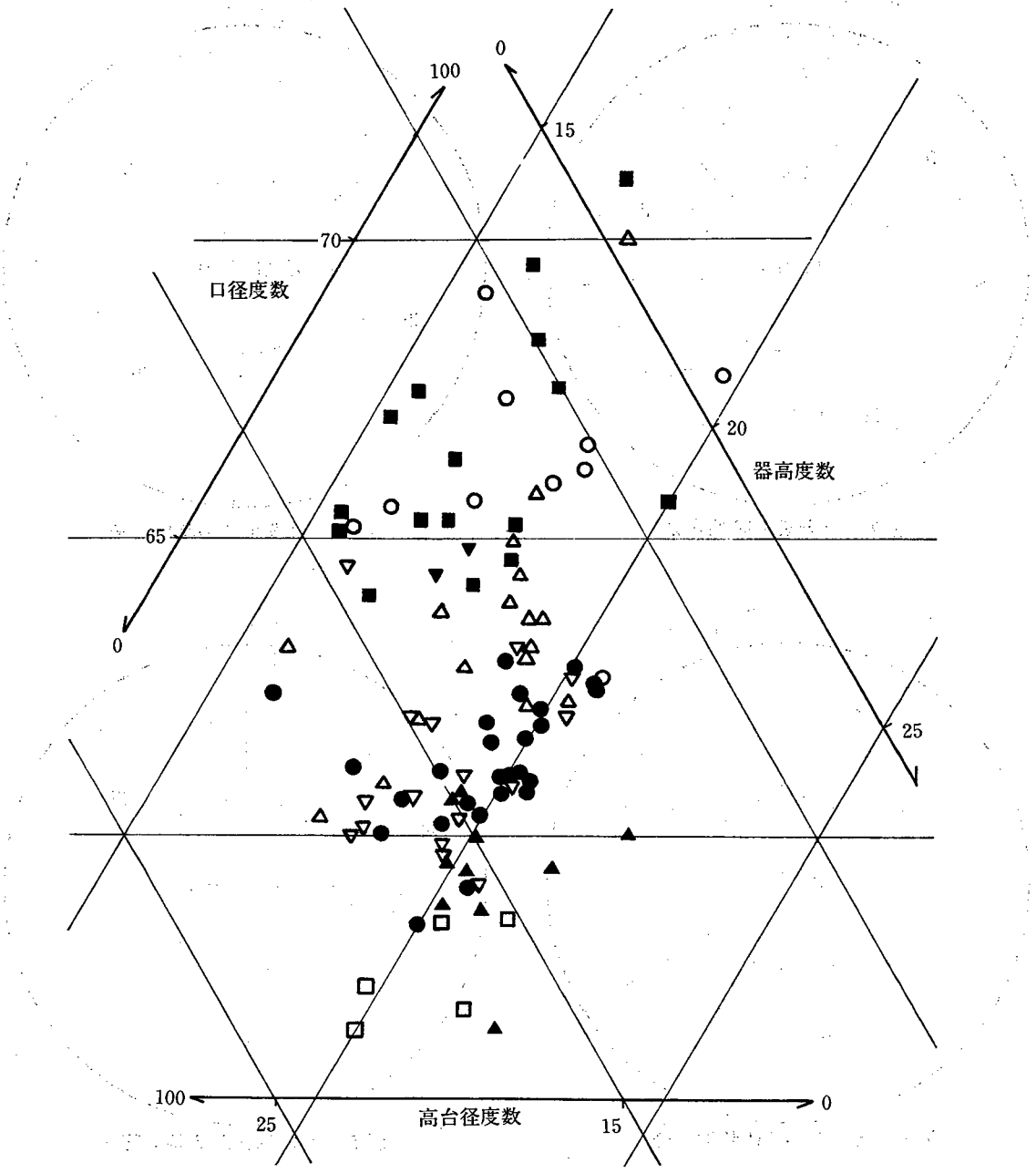


図5　土師器大皿の時期区分



□ II－2期　▲ II－3期　▽ III－1期　● III－2期

△ III－3期　■ VI－1期　○ VI－2期　▼ VI－3期

図6　瓦器埦の口径・器高・高台径度数分布

器高(cm) ＼ 口径(cm)	6.5以下	6.6 7.0	7.1 7.5	7.6 8.0	8.1 8.5	8.6 9.0	9.1 9.5	9.6 10.0	10.1 10.5	10.6 11.0	11.1 11.5	11.6 12.0	12.1 12.5	12.6 13.0	13.1 13.5	13.6 14.0	14.1 14.5	14.6 15.0	15.1 15.5	15.6 16.0	16.1以上	合計
1.0～以下																						
				1																		1
				1	1																	2
1.1～1.5																						
			2	3	3	4	1															13
	1	13	9	14	18	13		1														69
1.6～2.0																						
				3	7	7	12	6	1													36
		3	4	4	11	6	3	1				①										33
2.1～2.5														1								1
						3	5	3														11
										①		①			②	②						6
2.6～3.0									1	6	8	4	2	2								23
														②	②	⑦	②		①	②		16
3.1～3.5										1	4	4	1	8	1	2						21
													①	①								2
3.6～4.0														1			1	1				4
4.1～4.5																1	6	7	5			19
4.6～5.0																	9	14	16	4	1	44
5.1～5.5															1	1		4	5	2	1	14
5.6～6.0																	1		1	1		3
6.1～以上																			1		1	2
	1	16	15	26	40	33	21	11	2	8	13	10	4	15	6	13	19	26	29	9	3	320

表１　瓦器椀・瓦器小皿・土師器小皿・土師器大皿の口径と器高

（上段・瓦器椀、中段・瓦器小皿、下段・土師器小皿、下段○印・土師器大皿）

瓦器埦の形態変化は図６にみるように、各期における分布は、広い範囲での重複を繰り返しながら、徐々に縮小化の傾向にある。また、隣接する各期での変化率が、極めて小さい数値をとることも知り得た。しかしながら、唯一、Ⅲ－３期とⅣ－１期の間では、瓦器埦の変化の流れに大きな段差が生じている。この移行期には、埦以外の器種にも変化がみられる。図３・４は、瓦器小皿と土師器小皿の時期毎の量的比率を示したものである。Ⅲ期まで85.3％と高い比率を示していた瓦器小皿がⅣ期以降14.7％と減少し、代わって、Ⅲ期まで34％と低い比率を示していた土師器小皿がⅣ期以降66％と増加を示し、両者の量的関係が逆転する。さらに、図５は、土師器大皿の時期毎の量的比率を示したものである。資料不足ではあるが、Ⅲ期まで88％と高い比率を示し、Ⅳ期以降は12％と激減をみせる。このような様相の下で制作されたⅣ－１期の瓦器埦（平均口径12.2cm、平均器高3.1cm）はⅢ期の瓦器埦（平均口径14.7cm、平均器高4.7cm）と瓦器小皿（平均口径9.0cm、平均器高1.7cm）のほぼ中間形態を示している。

土師器大皿は、資料体数の不足から、特にⅣ期以降の様相については明瞭ではない。土師器大皿は、器高に顕著な変化をみせず、口径および量的増減関係において瓦器埦の変化にほぼ同調する。そこで、瓦器埦の変化率を土師器大皿にあてはめ、資料を欠くⅣ－１期の土師器大皿を想定してみると、その平均口径は12.0cm、平均器高は2.6cmとなり、Ⅲ－３期まで器高で大きな隔たりが生じていた両者が、Ⅳ－１期でほぼ同形態に至ると考えられる。

このように、Ⅳ期には、従来の瓦器埦と瓦器小皿の形態を同一視させた「瓦器埦」の登場が考えられる。さらに、この「瓦器埦」は土師器大皿を継承するものであったと推測される。ここに、従来、その形態・機能において分化が行われていた伝統的な個々の供膳形態を全く無視した「万能雑器」としての瓦器埦を想定したい。それはⅣ期以降の供膳形態において、瓦器埦・土師器小皿という極めて単純な器種構成に象徴されるかのようである。

そして、このような様相は、当時の窯業生産システムに何らかの変容を認めざるを得ないものである。

今後、良好な条件化での資料の蓄積をまち、貝塚市域の瓦器埦の編年確立をはかるとともに、実証主義的な議論がより必要とされるであろう。

（註１）　稲垣　晋也（1961）「法隆寺出土の瓦器埦 —— 瓦器埦の編年試論 ——」、『大和文化研究』第６巻第４号、ｐｐ19～34。

（註２）　白石太一郎（1969）「いわゆる瓦器に関する２・３の問題 —— 古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察」、『古代学研究』第54号、ｐｐ１－29。

白石太一郎（1975）「『瓦器』の生産に関する 2、3の覚え書」、『古代文化』第27巻第１号、ｐｐ１～12。

白石太一郎（1977）「越智氏居館跡出土の瓦器 —— 瓦器の終末年代に関して ——」、『古代学研究』第85号、ｐｐ24～31

（註３）　橋本　久和（1980ａ）「瓦器埦の地域色と分布」、『上牧遺跡発掘調査報告書』大阪、ｐｐ94～105。

（註４）　樋口　吉文（1978）『新金岡町所在遺跡発掘調査抄報（中世墓地の調査）』、大阪。

尾上　　実（1978）『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要 —— 藤井寺市野中・羽曳野市軽里所在 ——』、大阪。

尾上　　実（1983）「南河内の瓦器埦」、『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』所収、大阪、ｐｐ689～705。

鈴木　秀典（1982）「２）瓦器埦の編年」、『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』、大阪、ｐｐ278～284。

（註５）　西岡　巌・勝浦康守（1986）『王子遺跡発掘調査概要Ⅱ、第３次調査』、大阪。

（註６）　西岡　　巌（1984）『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅳ』、大阪。

西岡　　巌（1986）『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅷ』、大阪。

（註７）　橋本　久和（1280ｂ）「高槻における中世土器の編年」、『上牧遺跡発掘調査報告書』、大阪、ｐｐ86～93。

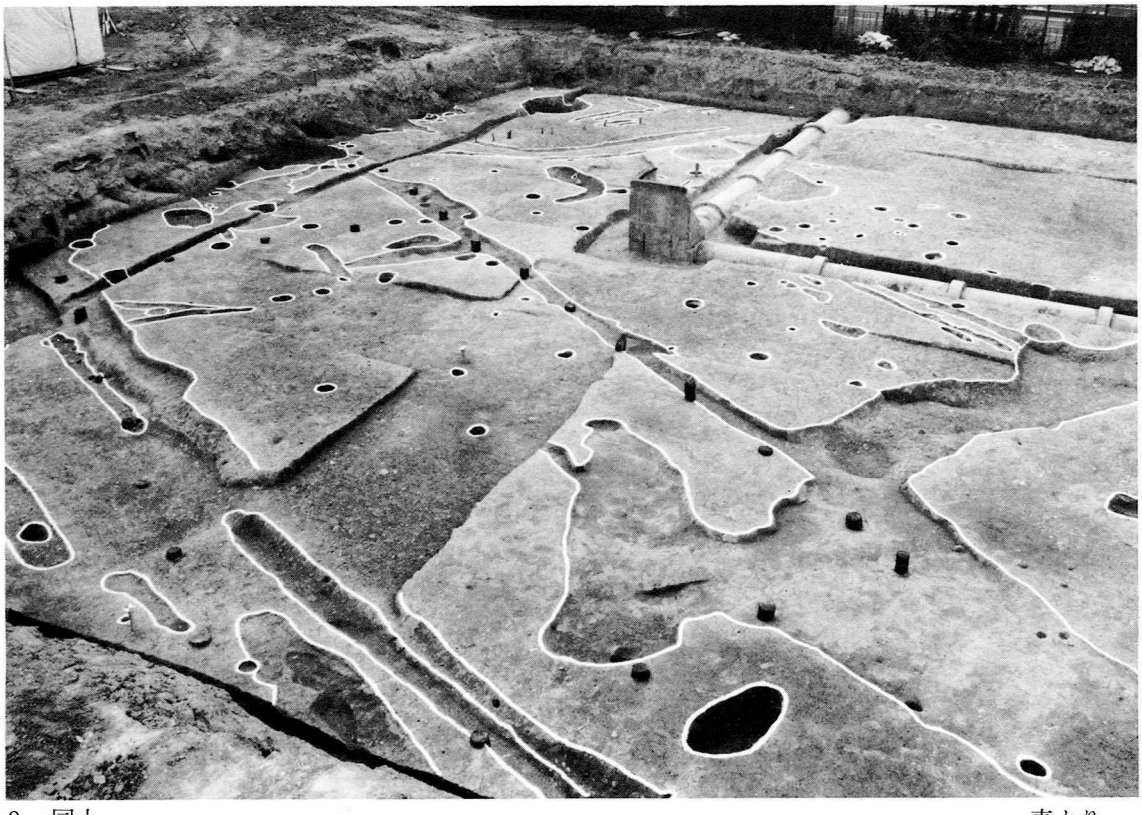
（註８）　鈴木秀典は、瓦器埦の変化の流れをⅠ～Ⅴ期に大きく分け、Ⅱ～Ⅳ期を各々３小期に細分している。また、実年代観については、Ⅰ期を11世紀中葉から約半世紀間、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ期を12、13、14世紀とし、Ⅴ期を15世紀前半に想定している。

図　　版

図版1　検出遺構

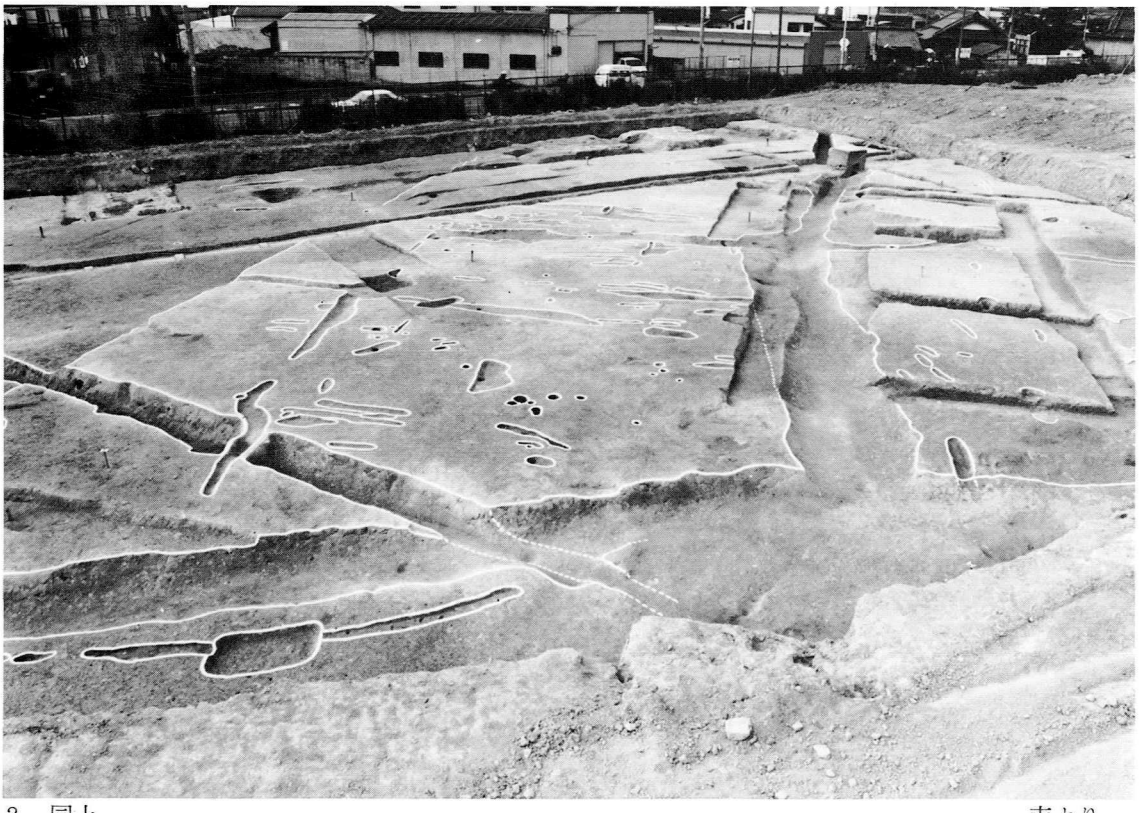
調査地全景

1．掘立柱建物群および井戸 SE-301　　西より

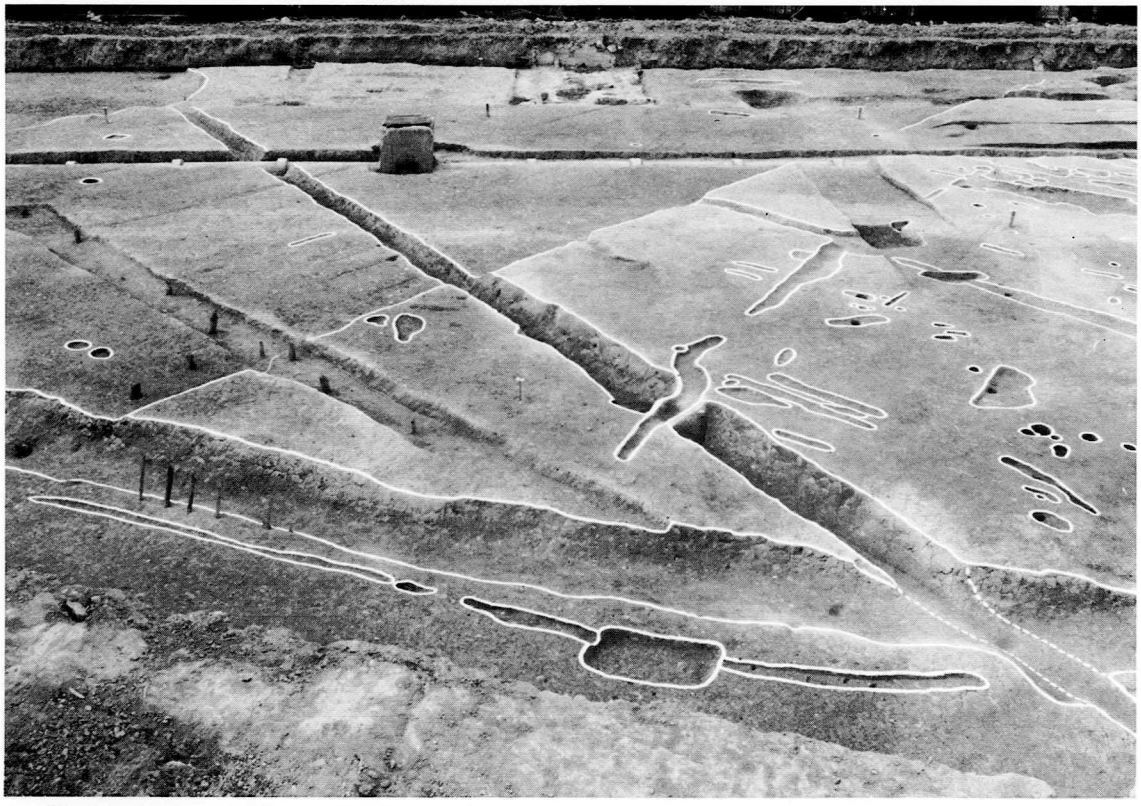


2．同上　　東より

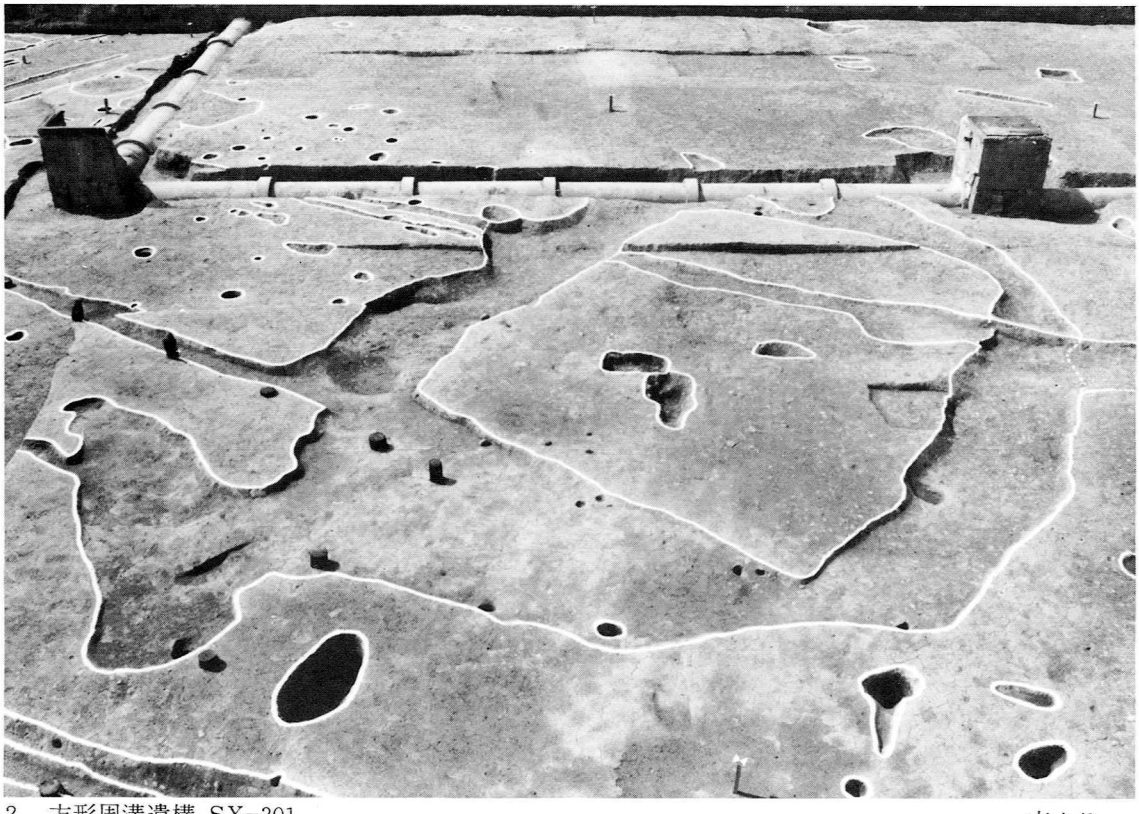
1．溝 SD-321 および小溝群　　北東より



2．同上　　南より

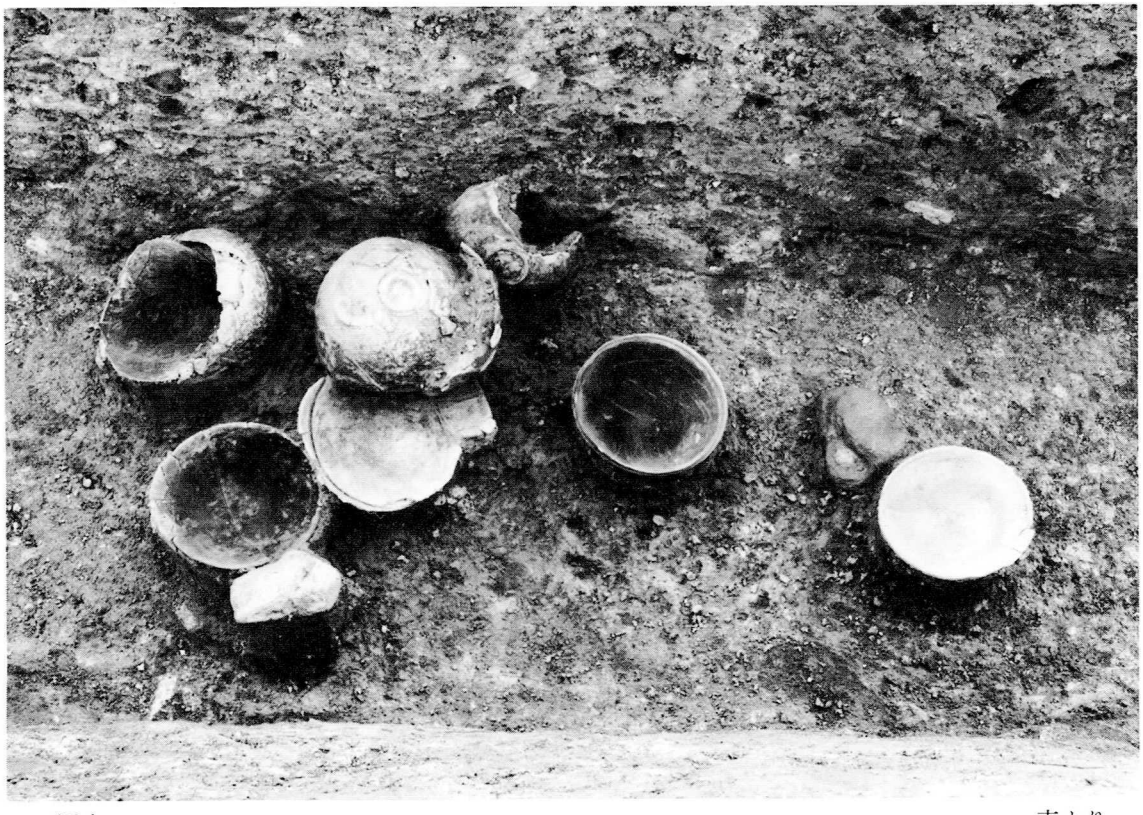


1．溝 SD-316 および段 SX-302　　南より



2．方形周溝遺構 SX-301　　南より

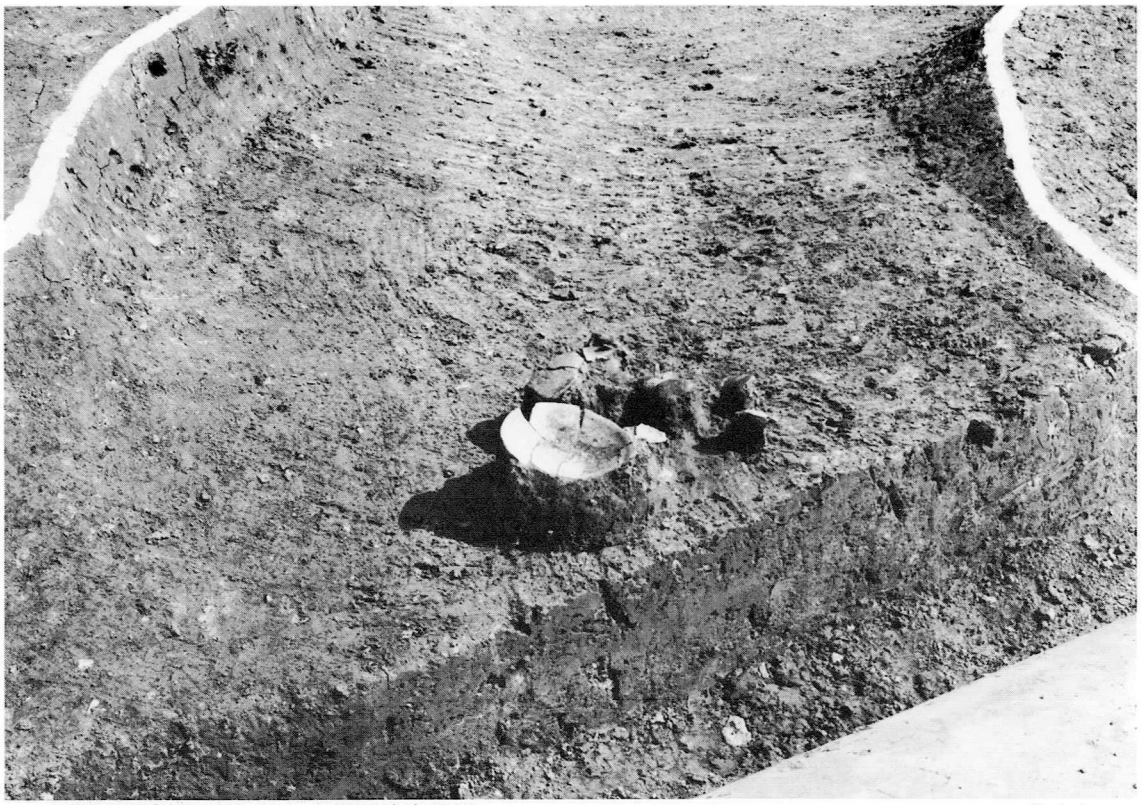
1．溝 SD-321 土器群検出状況　　南より



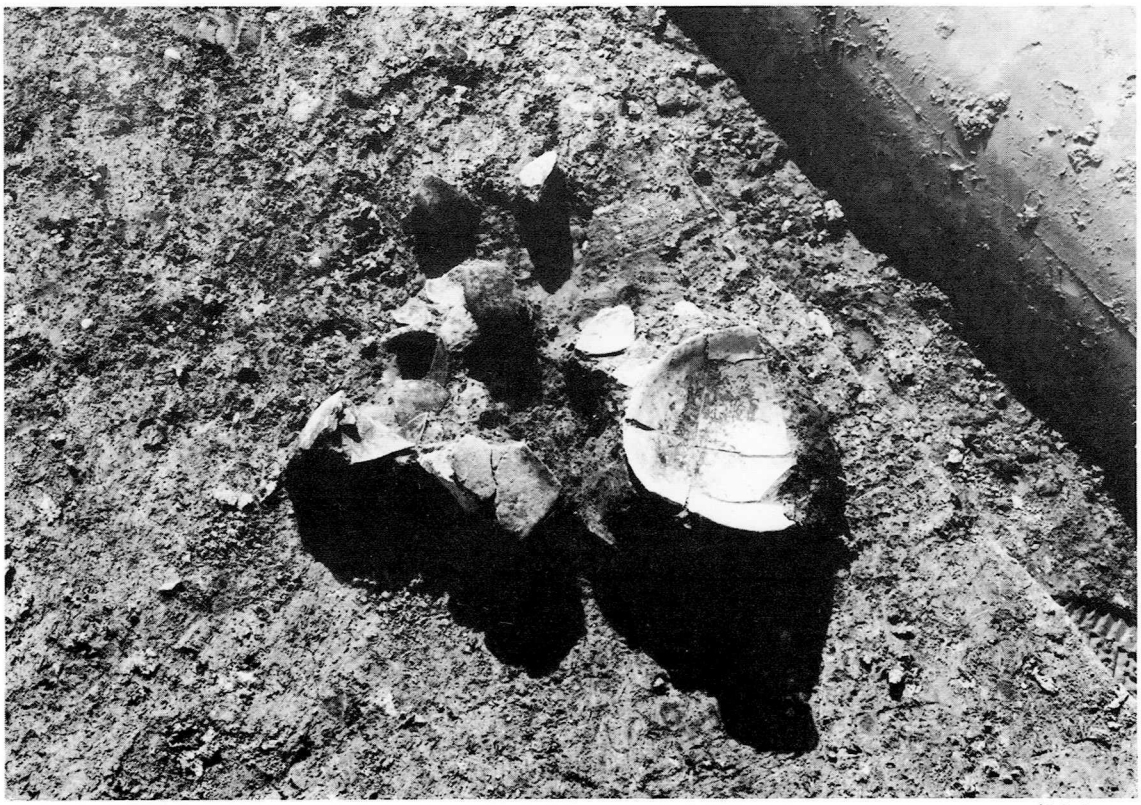
2．同上　　東より

1．土壙 SK-301 土器群検出状況　　北より

2．同上　　西より



1．方形周溝遺構 SX-301 土器群検出状況　　北より



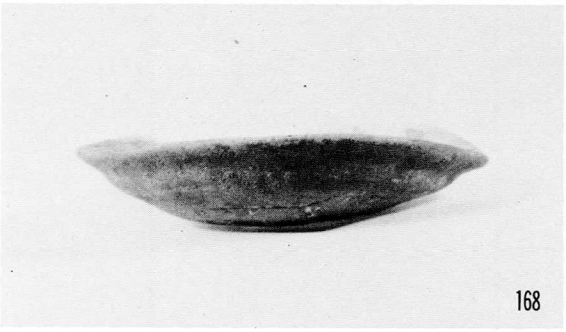
2．同上　　東より

162

163

166

167


168

169

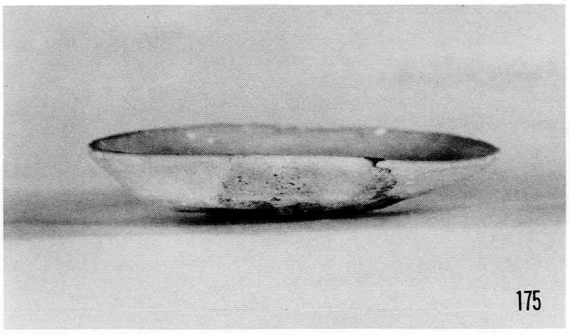
171

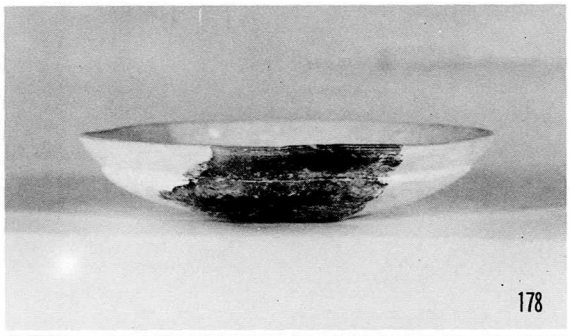
172

173

174

Pit-304(163・166～169)、Pit-312(162)、SE-301(171～174)


175


178

180

181

182

183

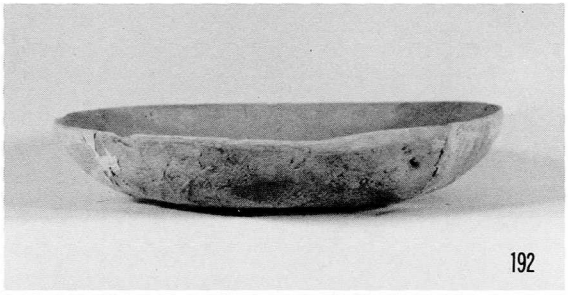
185

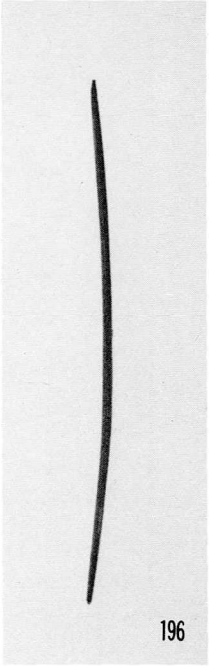
186

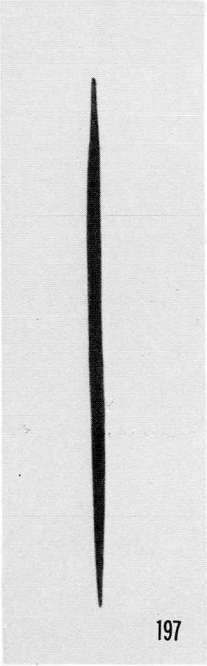
187

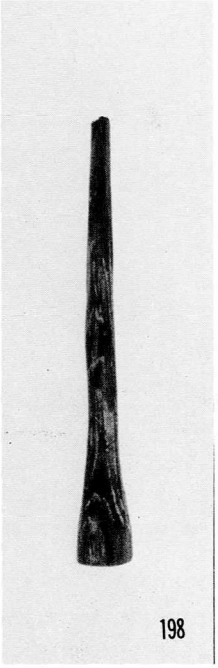
188

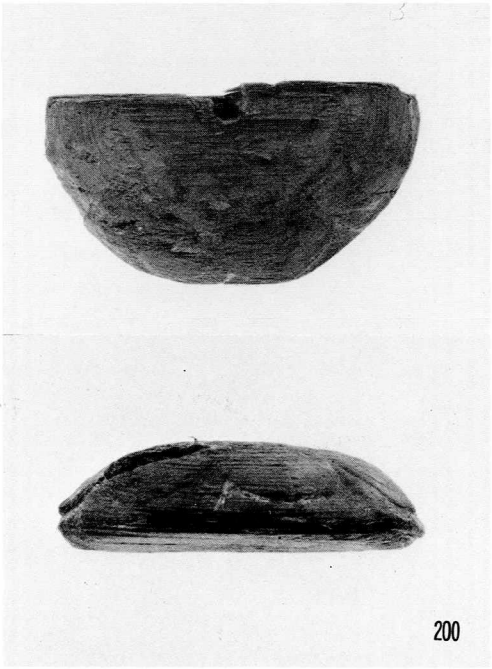
SE-301(175・178・180～183・185～188)











SE-301(189～194・196～198・200)

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

SD-321(201～210)

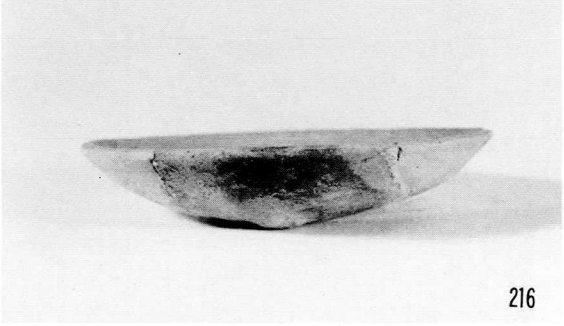
211

212

213

214

215


216

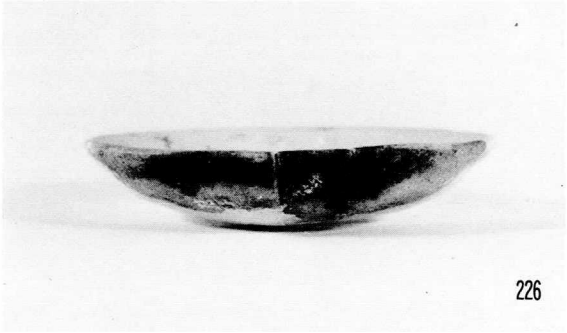
218

220

221

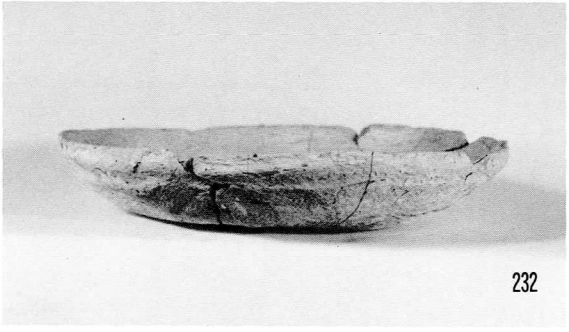
223

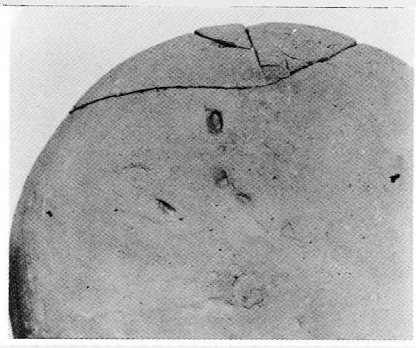
SD-321(211～216・218・220・221・223)


226

229

230


232


231

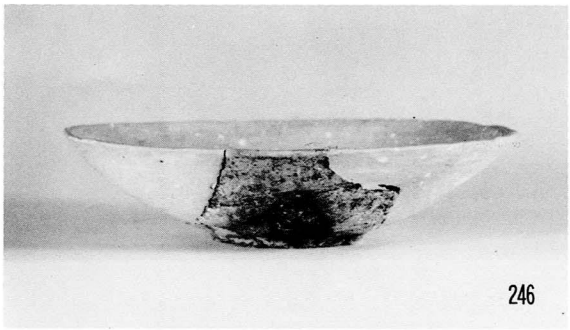
242

243

244

245

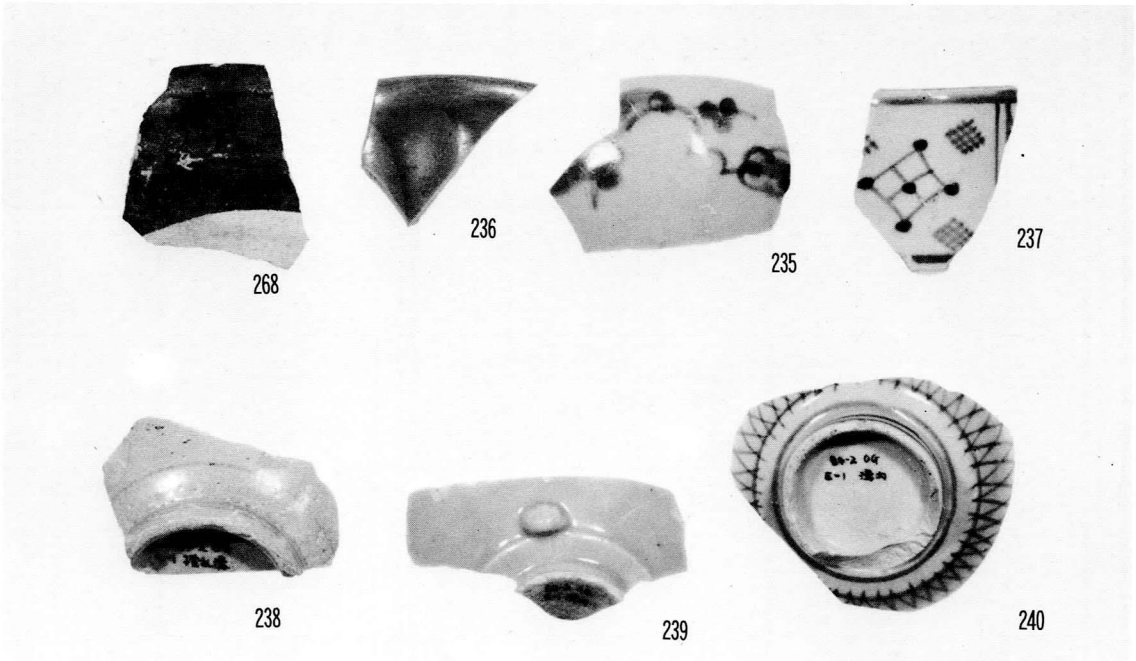
SD-321(226・229～232)、SK-301(244・245)、SK-302(243)、SX-301(242)

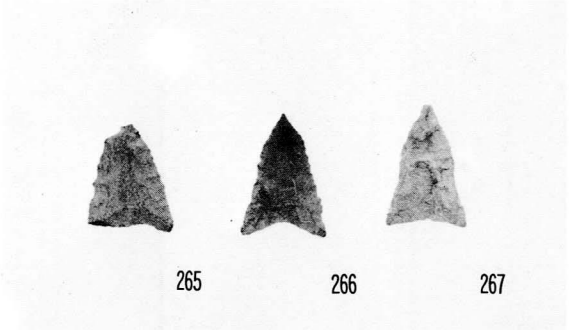

246

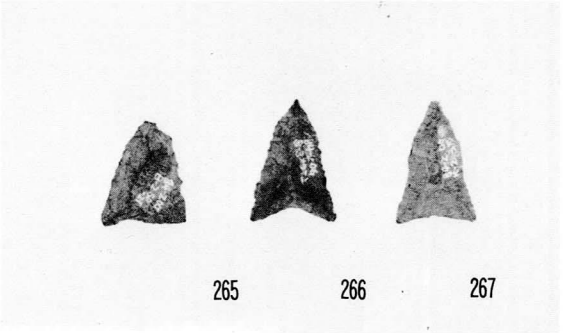
256

260

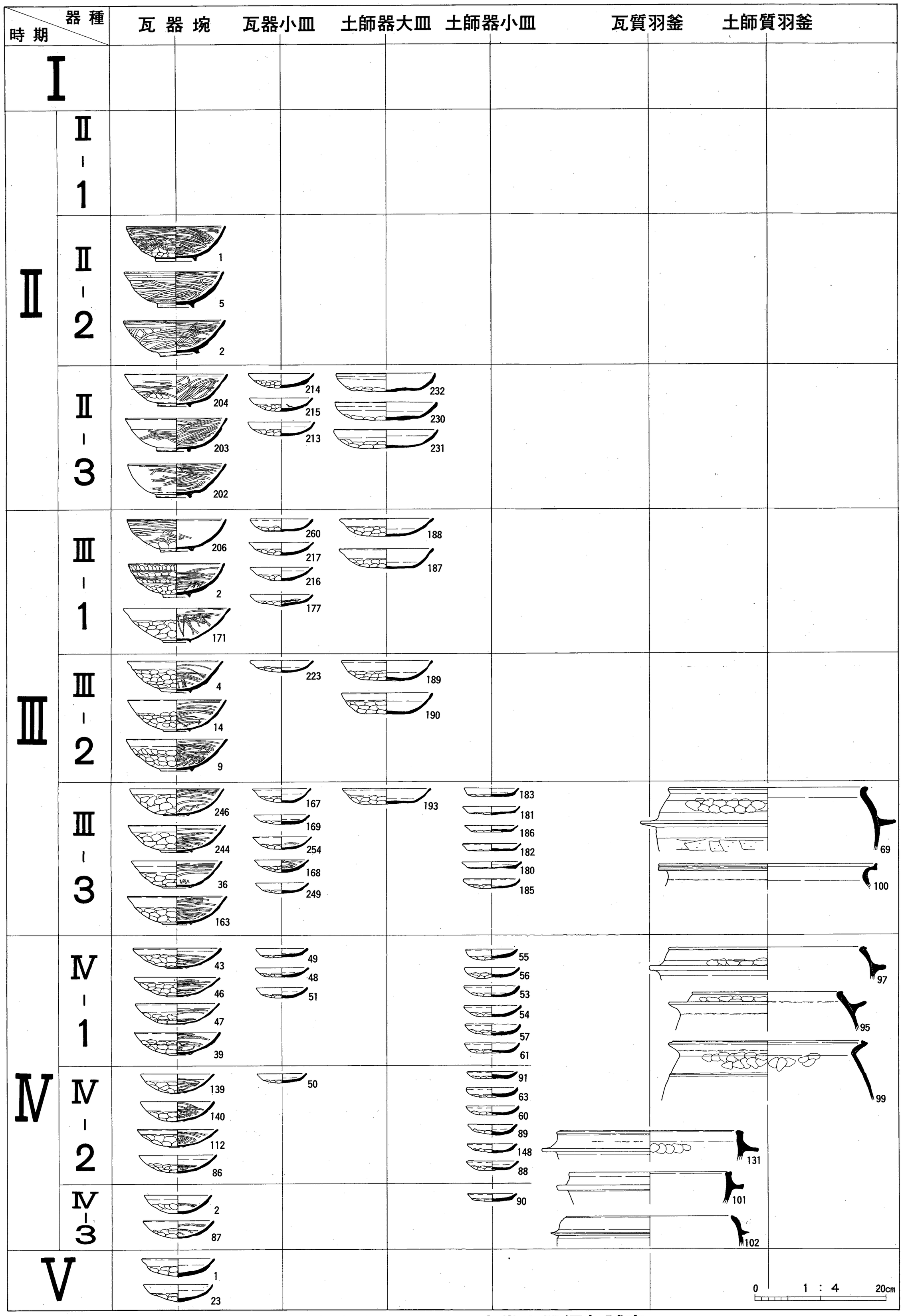
262







SK-301(246・256・260・262)、SD-301(235～240・268)、包含層,(265～267)



貝塚市遺跡群における中世土器編年試案

貝塚市埋蔵文化財調査報告第13集

王子遺跡発掘調査概報 II
第 3 次調査

発行日　昭和61年 3 月31日
編集・発行　貝塚市教育委員会
貝塚市畠中 1 丁目17番 1 号
印　刷　摂河泉文庫（貝塚市北町20－18）